俺たちには明日がないしねこのきもちはわからない、猫じゃないから

Samuel Norman

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺たちには明日がないしねこのきもちはわからない、猫じゃないから

【Ｎコード】

Ｎ７７９１Ｓ

【作者名】

Ｓａｍｕｅｌ　Ｎｏｒｍａｎ

【あらすじ】

それじゃあ、ご褒美をあげないとな。

にやりと中年の男はわらう

1　（前書き）

最初なので短めに書いておきます。
最後のまで読んで下さるとうれしいです。

1

０００

夜のことを決して僕は忘れない、あの夜のことを。
緑色の天使は傷つき、弱弱しく羽ばたき僕の前で倒れこんだ。
出会いは今までの僕の全てを一撃で破壊した。
常識の外側からのアプローチは、ほとほと深夜の都市に似た魅力を孕み、呼吸を忘れさせるのは十分だった。
……僕の楽しい高校の生活も、平和な日常も吹き飛んだ。
無欲な天使の願いはたった一つ……。

００１

滋野新剛（しのしんごう）は有名進学校に通う十七歳の男性である。品行方正を絵に描いたような風体と爽やかな雰囲気は初対面の相手の緊張感を解き、男女分け隔てなく話しかけやすい人物像を形成いた。
優等生の中では飛びぬけて頭が良く、勘も鋭い。絶句するほど……。
自分でも分かっていた皆とは違うと。
だから気づかれないように、止めを刺した。
自分自身に止めを刺した。
自身でも気付かないように止めを――刺した。
終止符を打った、殺した。
特別であるようにとの願いの下で。
だから、高校生である彼は、周りから見れば、無難にトップの成績をとる、学年に一人位はいるであろう、ただの優秀な学生であった。

彼は知っていたのだ、いや、より正確に表現するのならば、気づいたのだ。
自分と同じような人間は、どんなに隠してもこちらの事に理解を示し、集まってくると言う事が――分かった。
それが確信に変わったのは今から数週間前の、高校生となってからは初めての春休みの事であった。
つまり、今の滋野新剛は高校の二年生である。
そして、今の滋野新剛は高校二年生初めての登校である。
だから、今の滋野新剛は周囲に同じ制服を着た男子生徒と、同じ様な特色の制服を着た女子生徒がいる。

「退屈」

声が聞こえた気がした。

季節は春。早朝の空気はどこか慌ただしく、適度で心地よい緊張を孕んでいた。
僕、つまり滋野新剛にとってはすでに一年を過ごした学び舎であっても、短い春休みは長い夏の休みのそれよりも、日々の学校生活気分を力強くリセットさせる効用がある様な感じがした。
多くの学生たちが当然のように、時同じくして学び舎を目指す。
穏やかに続く坂道を歩いて行く風景を見ながら、見合いながら。
それは僕も漏れなく例外ではない。
温かくも少し肌寒い空気の中で、僕は、ぼんやりと……春休みの事を思い出していた。
人を好きになる事は無かった。
いつも心は誰にも動かされる事は無かった……。
ふと、強い風が生徒達を割って駆け抜け、ある女子生徒のスカートを勢いよく捲った。
衆目に露わになるは、つまらなく言えばただの布。しかし、年頃

の学生にとっては、その事実よりも少し重みのある装飾品である。
パンツ。
そして、その女子生徒はスカートを押さえ――るのが定石である。
が、当事者である女性はそれを隠すこともなく、歩き続けた。
静寂はすでにそこに広がっていた。
カツカツ、ずりずり、という足音が当たりに鳴り響いている。生徒一人一人の布のこすれる音が耳触り、桜の花弁が吹き荒れて、シトシトと音を立てる。
周りの雰囲気にのまれ、軽い吐き気とともに視界がぐらつく。
僕の三メートル前にいる男子生徒の鞄が彼の手から離れ、大きな音があたりに走った。そして男がゆっくりと地面に吸い寄せられる様に倒れる。
僕以外その光景に気づかない。
誰も目を向けない。
興味がない、関心の対象とならない。
直截的に言って、近くにいる者どもを同じ人間と感じられない、冷たくて淡白な行動がそれを増長させる。

異界。

学生時代は誰であっても珍事や変事を体験する。
それらは淡く切ない嫉妬や、意味のなく一所に熱中する狂気、そして儚い虚脱感を生みだしたりする。
しかし、いずれも酷く世間的に認知された、年寄りから見たら有体の出来事である。
けれども、これはそうではない。
そういったものとは一線を画す何かがあるのだ。それが何かはまだわからない。
春休みの最中からこう言ったことが身の回りでしばしば見られる光景となった。あたりの人間が急に虚ろに単調な行動を起こす。

見知った世界が、知らない物になってしまった。
でも、僕は知っている、さして気にする必要がない事を。そう、この現象は数分と続かないのだ。でも、それが本質でもないし問題でもないことであることも知っていた。
ただ、知っただけ。
そうこう考えている内に校門を過ぎ、学園内に僕は足を踏み入れていた。
僕の新学期がゆっくりと始まった。

1　（後書き）

ありがとう……見て下さって、本当にありがとうございます。

2、江戸川コナン探偵さ（前書き）

この話の登場人物は少ないです。登場人物が多いと名前を忘れてしまう。

2、江戸川コナン探偵さ

００２

校門、掲示板、張り紙、クラス、名前、移動。
で、教室。
割り当てられた教室に入ると耳に馴染んだ明るい挨拶がした。
「滋野君、おはよう、また同じクラスだね」
「おはよう、加藤さん元気そうだね」
僕は笑顔で返答をする。
黒板はピカピカに掃除されている。
加藤、加藤菜月は高校一年の時にあった女子である。出会った時から髪の毛を茶色に染めていて、小柄な彼女にしては大きめの茶色いカーディガンが好きらしい。
加藤菜月という女はどこかのほほんとしている穏やかな女性だった。
また、僕の前でうろちょろと、乱歩する女である。顔は綺麗というよりは可愛い系であり、胸がとびきり大きかった。きっと養分が全部そっちに行ってしまったのだろう。成績は良くない、なんとなく、鈍い感じがした。
しかし、決して愚かではない。
彼女には敵がいないのだ。そう仕向けている。
その様な外見と性格から、男子受けするのは確かで冷たくあしらったり、罵倒したりすると反感もろに食らってしまうからいつも笑顔で返答しているのだ。
というのは、少し嘘で実際、素直に彼女を表現すると良く好かれるタイプの人間だと思う、だから僕は彼女を尊敬していた。
そんなふうに生活できたらいいなと想う。
窓際の花瓶には枯れて、茶色に変色した菊があった。

当たり前の日常を実感するのは、見知った人間との意思の疎通をした時だと思う。
僕の学校生活が今、戻ってきたと思った。
「滋野君、この春どこか行った？　あのね私はね」
このように自分のことを話す。
落ち着きが無いと言うよりは焦っているような口調で話し始める。舌足らず気味な喋りが早口な印象をさらに加速させる。
僕は彼女の話を聞いている。
彼女はどうやらこの春休みに、海外旅行でマイアミに行っていたそうだ。
「海外か……僕には縁遠いな」
今までずっと旅行をしたことはなかった。正確に言うと、修学旅行は行ったのだが、正直あれをそこら辺の旅行と言うには、いささか疑問をもつ。
海外、陽気な夏の日差しと白い海……あんまり行きたくないなと内向的な僕の考え。
男友達ならば、ビーチにいる巨乳のお姉ちゃんとの絡みの話をこなすのだが、女性の前ではそうもいかない。
「あ、いまイヤラシイ事を考えたでしょ」
加藤菜月は僕の黒い瞳を覗き込む。
不安、疑念、があってか、僕は目をそらす。
一瞬何かずれていたものが重なるような感触のあと、ふと、この間の事を僕は思い出し、そして誤魔化し気味にその話題を振った。
「そういえば、飛行機事故があったんだって？　ニュースでやっていたけれど、巻き込まれないで良かったね」
「え？　ああ、うん……」
歯切れの悪い感じに応答した。不謹慎だったかな？
急な話題転換のためだろうか、加藤菜月はハトが豆鉄砲を食らったかの様に眼を大きく二度まばたかせた。
彼女特有のしっかりとした明るい茶色い瞳が外を向く。

誰かが窓を開けていたのか、強い風が教室中に駆け巡り、開けるたびにガラガラと音を立てるドアに消えた。
他愛の無い話をする。
色々な事も聞いた、マイアミは良い観光地だが殺人の検挙率が二割程度だとか、アメリカなのに英語が話せず、スペイン語を主流としている人が在住しているとか。
僕はと言うとあまり人様に話せるような内容の春休み生活を送ってはいなかったため、有体の話をした。当たり障りの無い日々、土日の延長線上みたいな休みであったといった。
嘘をついた。
それでも、彼女は一生懸命色々な出来事を楽しそうに話してくれた。
それに対して頷いて、笑って、目の端では、学校の柱にあたる白い壁に浮き出るシミを見つけていた。
彼女には申し訳ないが僕はどこかその話を上の空で聞いていた。そういえば、彼女、加藤菜月ってこんなふうに自分から話しかけるタイプだったかな？
クラス全体がこの初々しい空気に包まれていた。
どうという事は無いが、癖で僕はぐるりと、さり気無く周囲を見渡す、黒板の位置、窓の数、　席の数、今いる生徒の人数、広さ……。
女子生徒はよく知った中の友人たちが集まり、あまり知らない人間に向かって声をかけていたりしている。
男子生徒は……チョークスリーパーをかけている……何故だ。
普通の日常。
教室の隅、黒板が近いほうの入り口に、一人の女子生徒が目に入った。
何気なく、周りの生徒と話しているが、僕から見ると彼女は歪んでいた。
ガラガラと言う教室特有のドアの開閉音を出しながら、スーツ姿

の男が教室に入ってきた。
「はい、皆さんこんにちは」
背の高い案山子みたいな教師であった。
たちまち、話し合っていた生徒達は割り当てられた席に座り、去年と大して変わらないやり取りをした。
「あ、じゃあね。席に戻りまう」
彼女は最後の締め括りを噛んで自身の席に戻った。
歯切れの悪い世間話もちょっと噛みがちな言葉も彼女らしかった。
僕は彼女が席に着くまでずっとその姿を見ていた……。
長身の教師はまず黒板に自分の名前を“丞明楼(すけあくろう)”と書き、自己紹介をし、生徒たちにも簡単な自己紹介をさせた。
生徒達に割り当てられた席は名簿の通りであったから、最初に自己紹介をしたのは、黒板に近いほうの出入り口にいる、あの女性からだった。
「相戸夕です」
それだけ言うと、長い黒髪の彼女は座った。
その仕草はなんとも表現しがたかった。そういった仕草や立ち振る舞いを今まで見たことがなかったからなのかもしれない。
ひとことで言うと見事、なのだろうか。
優雅で静かで、見事だった。何よりも上品だった、そうだ、上品、この言葉がしっくりくる。　品の良さを感じた。
しかしその実、その仕草は神秘的で突き止め難く、モヤモヤと雲のように漂い、かたまり、沈んでいく感触が僕の中にはあった。
彼女、相戸夕は僕の印象に残った。
クラス中の男子は何人かを除いて惚け顔で、女子は気にしないフリをする者が多かった。
生来の美貌に加えてその品の良さがさらに彼女を魅力的にした。
前年度同じクラスだと思われる人たちは特に気にした様子では無かった。
彼女は一体どんな人なんだろうか？　知っている者は少ないらし

い。
もう殆どの人間がその次の生徒の自己紹介に興味を無くしていた。
十人ほどが名前と趣味、部活などを言った後。

「退屈だ」

声が聞こえた。次に打楽器の音がした、小さな音で一度だけ、近くに太鼓など無いし、音楽屋も近くにある訳では無いから、だからやはり僕の気のせいかも知れない。
学校の一日目などすぐに過ぎる、一日など直ぐに終わる。
学校での授業が終わっても生徒達はまだ帰らない、教室では所々で話し合いの光景が見受けられる。そうするのは特に女子生徒が多かった。

廊下から僕を呼ぶ明るい声が聞こえた。
にやりと笑って、そっちの方を見る。友人の海東啓（かいとうけい）である。
「今行く」
机から立つとクラリと立ちくらみがした。滅多にない立ちくらみだ。目の前が暗くなる。しかし廊下に向かう間に回復した。
こうして一日目は終わり、僕は帰路に着く。

2、江戸川コナン探偵さ（後書き）

目を通して下さって、ありがとうございます。……マジで。

3、帰宅の時（前書き）

また、こちらに足を運んでくださってありがとうございます。

3、帰宅の時

不思議に思う方も居られるだろうが、今現在。海東啓の学ランの胸ポケットには、小汚いキノコが刺さっている。

新品同様に仕立て上げられていた制服には似合わない茶色くなっているキノコ。今回はこのキノコの事についてしばしば、話をさせて頂きたい。

つい先ほど、五分も経っていない時、僕、滋野新剛の周りには僕を含めた五人男子生徒たちと共に帰路についていた、その中にいる一人の友人である海東啓。事の発端は、この人物の小さな一つの発見による。

どこにでもいるような学生が会話をする中、海東啓はこう言った。

「あれ？　おい、あれキノコじゃね？」

彼の指さす方向には家々の隙間の細い路地に一対の茶色いキノコが生えていた。

彼は何を思ったのか、急にキノコに急接近し、自身の手を男性の究極に模した様なキノコに差し出した、この狭い世界から出してあげると。

根っ子から取りだされたキノコには、自身のいた名残の土が僅かに付着していた。

「くせえ！」

取り上げた第一声がソレだった。

「すごい、まるで猫の尿が具象化したみたいな匂いだ、おううぇぇぇ、気持ちわりぃ」

他の友人たちは思い思いに、汚ねー、早く捨てろよ～、などと言いながら、僕以外の三人は笑っている。が、しかし僕はこの時、海東啓の次の発言を予見していた。皆、駄目だ、早く帰るぞ、そいつ（海東啓）は見捨てていくんだ！　という警告が脳裏を走り、無意

識に後ずさろうとすると同時に、海東啓は言った。
「おい。阿部、お前これ胸ポケットに差したら、お洒落じゃね？」
バレー部の阿部の笑顔が消えた。
阿部、後輩からは阿部さんと慕われる事を夢見てバレー部に入部。
先輩からは千円やるから一緒に寝ろ、と合宿中に言われ宿舎から逃げ、身長とジャンプ力の高さを活かしたアタックに定評のある阿部。
女子バレー部の豊田さんと付き合っている阿部。
豊田さんはしっかりとした眼が印象的な美人であった、身体的曲線はなだらかに美しく、少し変わった笑い方と、少しずれた笑いの壺を有する少女。
あの件の合宿中に阿部自分がストレートである証明のために告白をし、上手く成就してしまった……阿部。
以降ずっと調子に乗っていた阿部。
今日は久々に彼女と二人で下校をするという淡い夢を持ちながら、海東啓に砕かれた阿部。
阿部以外の二人（畦上（あぜがみ）、志渡（しどう））は大爆笑、思い思いの激励の言葉を阿部にかける。
僕は思う、違う駄目だ、そんな一人だけを人身御供にしても海東啓は止められないんだ。
阿部の一撃が口から飛び出る。
「いや、そう言うのは、シドーの方が似合うともうな」
え？　まるで銃弾を浴びた刑事のように、志渡は息を吐いた。
しかし、すかさず海東啓。
「俺は～お前の方が似合うと思うな」
彼目には、阿部しか捉えられていない。
脱走を図るべく畦上はそれと無く、後じさりする。
「おい、畦上――」
志渡は畦上に投げかけるが……。
「じゃんけんしよう」

畦上は言う。これで終わりにするために。
「いいだろう」
にやりと唇を弧の形に歪ませる海東啓。その眼は負ける気がしないと言っている。
結果が出てから少しだけ時間が過ぎた。
その時ちょうど、加藤菜月を含めた数人の女子生徒やってきて背後から話しかけてきた。固まっている集団を見て何をしているのと言った風に。
「なにしてるの？　男どうしで固まっちゃって、ゲイなの？」
しっかりした良く通る声がした。
この時の阿部は微小していた。
「いやー、海東がすげーお洒落なんだよ。ほら見て」
明るい声の阿部、海東の胸ポケットを指指して言う。
そこに在るのはキノコである、茶色く小汚いその辺にあったキノコ。
海東啓は僕たちに目配せをする、俺様の生き様を見な！　という、声が聞こえた気がする。
「……どう？　似合うかな」
彼女たちは一瞬固まったが、直ぐに返答をする。
「うーん、似合わない、変」
「うん、変だね」
「おかしいね」
「キモっ、なにやってるの。消えろカス」
異なる口が同じ意味をなすに返事をする。
「そうかな～、俺は似合うと思うんだけどな～。じゃあ、どうすれば良いかな？」
海東啓は、ある意味空気を読んだのだ。確かにここで「そうか、じゃあこれは捨てるよ」と爽やかスマイルで忌まわしき突起物を捨てる事もできただろう。
が、それをしなかった、決して引かず前に出たのだ。

眼鏡をかけた真面目そうな女生徒が、若干胞子が黒い学ランに付着し、白を広げていることを確認してから言った。
「そのキノコを引っこ抜け」
眼鏡をかけた真面目そうな女子生徒はその顔に似合わない行動を取っていた。
彼女、白峰と言ったか、僕も海東啓もこの手のタイプには初めて出会った、出会いの瞬間であった。おそらく、海東啓と先刻まで名も知らぬ彼女は出会った瞬間に特別な関係に成るタイプの人種だったのだろう。
そう結果から言ってしまえば、彼女のキノコという単語は非常に多角的な意味を内包していた。と、言えば全てお分かり頂けるかと思われる。

彼女たちとの別れの後も、僕たちは、知らない人や、学校の知人が近くに来る度に「すげーそれお洒落じゃん！」と言って胸ポケットを指さし新しいトレンドを浸透させるべく草の根活動を行った。
通行人の何人かは吹き出していたのでこの企画は大成功を収めたのであった。
「それにしても、こえ～」
彼、海東啓は言う。
「まさか、あんな真面目眼鏡が、いとも容易くえげつない行動に出るなんて……」
「きっと相当気に障ったんだな」
阿部は良い笑顔で返答する、その笑顔は他人の不幸によってしか人間は真の幸福には至らない事を暗に告げていた。

駅について、僕と海東啓。それと、そのたのメンバーとで別れた。
海東啓とは竹馬の友で、生活区域も非常に近く、確か付き合いは幼稚園からだったと思う。
小中高と同じ学校に進学した。クラスは違えども学校があれば大

抵週三のペースで電車内で会っている。もしも仮にこれが知らない女の事であれば運命の出会いとなるだろう。
春休みの僕は、誰とも会っていない。と、言うよりは今まで会った事の無い人としか会う機会が無かった。だから、加藤啓と会うのは今日が本当に久しぶりで、僕自身の変わってしまった様を見て何かを言われるのでは無いかと思っていた。そして問われれば彼だけには正直でいようと思った。
――だって、親友だから……。
だから、僕も問おう、彼の異変について、気になる、興味本位という心情は無いにしろ、相手にとってはそう思われてしまうかもしれない。
それでも、僕は彼に聞かずにはいられなかった。
電車が僕たちの降りるべき駅に止まり、足を進める。さっきまであったはずのキノコはもう無い。
僕は言った。彼の眼を見て僕は言う。
「啓。春休み何があった？」
彼は立ち止った。僕の真意を汲んでくれたのだ。
時々、僕は彼の眼を見ると何を言っているか分かる時がある。
「それを聞いてさっ、滋野。お前どうするよ？」
おどけるような、言葉を選び、真剣な口調で海東啓は僕に問うた。
「いや、別に……なんとなく感じが変わったから」
ごまかしの様な煮え切らない答えであったのは重々承知であったが、僕は踏み切れなかった。
彼の身の上に起こっていただろう事は、僕の考えが到底及ばないだろう。
だって、僕の影の隣にある彼の影はもう殆ど霞んでいてそこには無いのだから。
啓はいった。
「俺自身は特に何かがあったわけじゃないんだ、取り巻く環境が、って感じかな」

粗末な言葉の省略が後ろめたそうに彼の内心となって表れている。
もう、この話の続きは聞けそうにはない。
手を頭の後ろで組みながら僕の前を歩く啓は慎重に言葉を選んでいる気がした。
「それと俺さ、剛を探してる人にはあったな。悪い人ではないとは思うけれどさ、まあ近いうちに会いに来るかもな」
「え？　僕に会いたい人か……心当たりは無いのだけれど。どんな人だった？」
啓は手を組んだまま振り返って僕にいった。
「うーん、難しいな……男で中肉中背、印象的じゃないのが印象かな、浮世離れしてる様な、頼りがいのあるような……まあ、俺には分かんねえや」
「……」
「なんだよ、心配するな。いい人だと思うぜ」
啓は少しだけ口から歯を覗かせて笑い、僕たちは別れた。海東啓がいい人だというのならば、きっと害にはなるまい。親の知り合いかもしれない、などと思いながら、まだ高くにある太陽を背にして、僕は家に足を向け歩いた。

3、帰宅の時（後書き）

あとがきの文字制限が〜２００００文字以内で入力〜らしいです、
ちょっと多すぎないかな？
それはともかく、目を通して下さって多謝。

4、皆の家（前書き）

学校帰りの家での風景　短めです。

4、皆の家

００３

僕の家はこれと言った特徴の無い何処かにあると感じられるような一軒家だ。

一階には生活臭のあまり無いリビング、同じ型の白い食器と

二階には僕の部屋がある、僕の部屋には何もない。何も無いというのは学業に必要の無い物は無いと言う事だ。机と椅子、本棚にクローゼットそしてベッド。しかし、普通の家には無いとても奇抜なものが置いてある。

部屋の隅、窓の傍、いつも同じ場所に黙って立っている。緑色の瞳に黒い横線の眼を持ち、同じく緑色の肩までかかる髪の女。多分僕にしか、もう見えてはいないだろう。

羽を持った緑色の人型。

弱い兵士、堕ちた天使。

「ただいま。今、帰ったよ」

自分の部屋の扉を開けると最初に彼女を見てから僕は言う。

「……」

天使は何も言わない。

「今日は変な女性を見たんだ、品が良いのは一目でわかったんだけれども。なんていうのかな……歪んで見えるんだ。何だろう、不思議な感じだったんだけれど……」

天使は動かない。

そっと彼女の頭に手を置いて、自分の手を動かしてみる。

頭を撫でているのだ。

嫌がるそぶりも、喜ぶ様子も無い、何の反応も無い。彼女は少し温かい。

「元気かい？」

最後にいつもと同じ言葉をかける。
彼女は瞬きをした。
言葉は無い。
今日も天使は何も言わない。

5、委員会の日（前）

次の日。
このクラスでは委員会などを決める日であった。
去年僕は生徒会に所属していた。
当然と言うのだろうか、去年とも変わらず生徒会とか言う変な団体に入るのは御免だ。面倒だし知るべき事は無いと思ったからだ。
いろんな行事の事に確実に携わる事が出来、学校の事もよく分かるが、一年やれば後の仕事内容は変わらないし、教師や生徒の使いっパシリも飽きている。
そうだな……美化委員会も似たようなものだろうか、図書委員と言っても静かな場所で本の整理をするだけだろうし……。
勝手な妄想をかきたてた。
黒板に書かれた文字を見て考えていた何をしようかと。ふと目に飛び込んだのは風紀委員会と言う文字の横に上手な字で書かれた“相戸夕”という文字だった。
説明し忘れていたが、担任の丞明は黒板に、これもまた黒板に書いた字とは思えないほどの達筆で、委員会名を書き、生徒達にやりたい者に名前を書くように言った。
やりたいもの、と言っても実際はどれかには所属しなければならないから。皆は可能な限り面倒事が無い物を選ぶか、または意中の異性と同じ委員会に所属し、接点を増やそうといった目的で選ぶ者がいる。
風紀委員会か、何をやるんだろうか正直今までノータッチだった。そもそもこの学校の治安は良いのでその取締り用も無いように思う。
暇そうな委員会も良いか、と思い何気なく彼女の文字の隣に“滋野新剛”と僕の文字を書いて、自分の席に着いた。
ぼんやりとあたりを見回していると相戸夕は自分の席で何かを書いていた。

「ねえ。生徒会はやらないの？」
明かすく弾んだ声がした。美人と言うよりかわいい系の加藤菜月である。
「面倒だし、学校の勝手が分かったからね。今回はやらないよ」
ふーん、と言う仕草をして、彼女は「じゃあ、私も別のにしようかな」と言う。
「え？　加藤さんって生徒……いや。何でも無い」
ふと目を黒板にやると生徒会の右下には彼女の名前が書かれていた。
「あ～私じゃ不安だって言いたいんでしょ、もう」
そう言って彼女は黒板の方に駆け寄って、そのまま生徒会の近くから、風紀委員会の所に名前を書き移した。
「頼りにしているんだからね」
と加藤は僕に言って席に着く。
委員会は男女一人ずつがルールであり、結果としては、クラスで目を引く女性二人が名を連ねる風紀委員会の隣には、彼女たちと一緒になろうと目論んだ男子生徒達と僕とでじゃんけんをし、加藤菜月と相戸夕とでじゃんけんをすることとなった。
結果、最初と変わらず僕と相戸夕が風紀委員会に所属する事が決まった。そして、僕を頼ればまあ良いと言う考えが見え見えだったであろう、おっとり加藤さんはなんと生徒会に所属する事になってしまった。
何気なく、こう言うことが青春というやつなのかもしれないな。と、僕はおっさん臭い感想を持ってしまった。
その日、その時に僕は一度だけ相戸夕と目があった、「よろしく」と言おうと思ったが直ぐに彼女は近くの女子と話し始め、結局話せずじまいだった。

6，iinkainohi　（後）

放課後、生徒たちは各々の委員会ごとに異なる教室で、その会の説明と、委員長などの役職を決めることになっていた。

風紀委員会の集まったのはパソコン室。

学年と組単位で席が決まっていて、パソコンのディスプレイを見ながら、色々とレクチャーされた。

隣にいる相戸夕は背筋をぴんと伸ばし、背もたれを使うことなく、画面を凝視していた。とても真面目な印象を受けるが、委員長、副委員長、書記、などの雑用は華麗にスルーしていた。

次の日。新入生と在学生のための集会があった。

説明が終わって実際に活動した感想、この委員会は謎である。

主な活動は生徒一同の集会などがある時。風紀委員会の面々が校舎の至る所で生徒達が集会をサボってその辺をうろうろしていないかを見張る。と言う事が役目なのだ。

原則、同じクラスの者が二人一組となって廊下と階段を含めたワンフロアを見回るのだが、結果的には二人で、ほぼ二人きりで、男女が、若い異性同士が話をするのだ。

だから、風紀委員の面々は集会に参加しない、やることがないので会話をしたり、そのフロアをうろつく、携帯で遊んだり、本を読んだり好き勝手にしているのだ。

だから、実質、集会に集まらずに校舎を徘徊している生徒は皆、風紀委員会なのだ。

本末転倒。

そもそも、本校の生徒は基本的に真面目なタイプが多い、どんなにチャラチャラしている生徒でも、一年生の夏が終わる頃には、すでに大学受験のために少しずつ自学自習をする者が大半だし、それを知っている教師たちも、集会は手短に済ませ、勉強や部活に割け

る時間を多めに取れるようにしている。
自由な校風なのだ、故に責任は自分で取るしか無いと考える生徒。いい循環だと思う。
話を戻そう、徘徊している風紀委員の話だ。
当然、このような事情により意図せず互いの関係が進展する事がままある。
そう本校風紀委員会ではこの様な矛盾を孕んでいるのだ、風紀委員の風紀はあまりよろしくはない、主客転倒な感想を誰もが持っている。しかしそれが良い。
各階に生徒がいても、このフロアに二人しかいないとなると、真夜中の駅構内に独り置き去りにされたような奇妙な高揚を思わせた。
黙って、階段に座りながら頬杖をつく相戸夕。
長くて黒い髪を後ろから眺めながら、ずっとこのまま話さないままではあまりにも気まずい、　僕もそれとなく人一人分の間隔をあけて彼女の隣に座った。
目の端に相戸夕をとらえながら、目の前にある踊り場の大きな窓を見て、そして首を横に動かした。
すると、相戸夕は立ち上がり、階段を降りた。
目を合わせることもなく、まるで傍らに人が居ないかの如く、何気なく階段を下る。
Ｗｈｙ？　いったい僕が何をしたというのだ。
……いや、違う。僕は知っていた。人間どんなに当たり障りなく、大勢に好かれるような明るく爽やかなキャラクターであったとしても、いや、むしろ逆に誰の関心も引かないような薄い、希薄な影の様な人間であっても、万人に嫌われないという事はない事を知っていた。万人に好かれることは無くとも、嫌われないことはないのだから。
きっと、誰か一人ぐらいは君のことをどう仕様も無いぐらいに忌諱している。
人間は人間がどう仕様も無いぐらいに嫌悪し憎悪し厭忌すること

を根本的に本能に刻み込まれている、という事を僕は知っているはずだった。
人間であれば、何もせずに好かれることは絶対にない。
第一印象、つまり見た目。「ああ、この人、かっこいいな」とか「綺麗な人だな」と思っても、心は次第に動き始める。
近づくことがなく、相手をそれ以上知ろうとしなければ、心のどこかで、それでも性格は……とか、何を抱えているのかわからないしな……とか、あいつだけ、と嫉妬や僻みといった心は時と共に自然に湧いてくる。
好かれることは信頼されることと同様に難しい。
万人受けする人間でも八方美人な奴め、と心は動く。
分かり合いたくない。
何よりも、人は自分を知るが故に他人を信じない。他人を信じないから疑い、それらが全て自身に還り心を摩耗させる。
それでも、それだからこそ……と声を張り上げた者を僕は知っている、その者の結末も知っていた。
そんな考えが頭を過り。まあ仕方ない、と僕は彼女との人間関係を諦めた。
とは言っても、実際に無視されるとあっちに行けと言われるよりも精神的に負荷がかかるんだな、とどこか他人ごとのように逃避する僕。
黙って離れる相戸夕。
しかし、ここからが意外だった。
階段を三つ降りて振り向く相戸夕。ちょうどこの時、僕と彼女の目線が同じ位置に来た。僕の目を見る相戸夕。真っ黒い大きな瞳の力が強くて、圧されている感じがする。
僕も躍起になっているのか、その瞳から目を逸らせないでいた。
「好きです、大好きです。私と付き合ってください」
……？　……？　……？
思いもやらない音を聞いた。

「……やっぱり、だめですよね、すいません。あまりにも唐突ですよね……まだお互い、顔と名前しか知らないのに……」
そういって悲しそうに目を伏せると、僕に背を向け相戸夕はそのまま、階段を下っていった。
「え、ちょっちょちょ待って」
噛んだ。相戸夕との初めての会話を噛んだ。正直、自分でもどうかと思う。
ここで、くすくすと忍び笑い。隠しているつもりだろうが、肩が震えているため笑っている事は背中越しに動揺している僕にまる分かりだった。
再び彼女はふわりとその長い髪を宙に舞わせて、振り返る、その顔は笑っていて、さっきよりも低いところにいるから、僕を見上げてる形になる。
僕を見上げるその目は、どことなく見下している印象を僕に与えた。
「あなたって、可愛いところがあるのね」
「え？」
「あたなって、可愛いところがあるのねっていったのよ」
「あ、ああ？　どういう意味？」
うまく文意を汲み取れない僕。同時に少しずつ頭の整理をする。
「だって、あなた、この学年で一番できる生徒でしょ。満点以外とったことが無いんじゃないの？」
「そんなことはない、ぼくだって、ミスぐらいあるさ。それに……」
そんなモノに意味なんて無い。
「そんな、人だから、きっとすごく固くて真面目、理路整然としているのかなって勝手に想像していたの。だから、白状すると……からかってみたかったのよ」
階段を登り、僕と同じ段に立ち、手を腰に当て、胸を張りなら彼女は言った。
「ほら、私って美人でしょ」

と、したり顔。
「ああ、……うん」
なんだか、どうでもよくなってきた。このセリフだけは考えが及ばなかったな……凄い自信家の女性もいるんだな。
「あのさ、男の僕から言うのもアレなんだけれど、その姿勢だとパンツが見えそうだから、座ったほうがいいよ」
相戸は口をへの字に曲げ眉をハの字に歪め、ため息混じりにスカートを抑えながら僕の隣りに座った。
「同じ水の中に入るにしても、プールとお風呂じゃ意味合いが違うわよね」
「え、何？」
「ねえ滋野君、私と週末プールに行かない？」
多少の戸惑いはあるものの、返答をした。
「……えーと、ああ良いよ、その日は予定が無いから、海東とかも読んで皆で行こうか、どうせアイツ暇だろうし」
「その後一緒にお風呂に入りましょう」
！
自分でもわかる。きっと顔は赤くなっているだろうと。
けれどもそれは羞恥とかその類の何かを感じたから、と言うのとは違った。全く予想できないことに対しての怖れからくる鼓動の跳躍とも言える嫌な汗をかかせるような皮膚の赤であったと分かった。
「嘘よ、それにしてもどうしてそんなに赤くなるのかしらね、いやらしいことでも考えていたの？」
「……おまえ、僕に何を言わせたいんだ」
「あら、別に、石鹸はいやらしくは無いじゃない」
「え？　僕石鹸なんて言っ…………あ、ソープって言わせたかったのか！　このやりとりでその流れはおかしいだろ」
「あら、結構知ってるものなのね、意外だわ。そして口調が変わったわ。もっと言うと、そんなに親しくもない男からオマエ扱いされるのは、それはとても気分を害したわ」

「ごめん」
相戸夕は中指を一本立てて、僕の頬を押した。その時、彼女の爪が食い込む程押してきたので言うまでもなく、痛かった。
そして一言。
「嘘よ」
彼女は笑った。
そして、集会が終わったのか、廊下に生徒たちの雑踏が聞こえ始めた。
僕は頬を摩った。

6，iinkainohi（後）（後書き）

まだまだ続きます。

そして本気で？？？？？？？　？？？？？？／？？？？

7、夢

０００

目を開けるとそこは僕の住む家だった。

布団の上にいてシーツを被っていた。

部屋は暗く、少しだけ寒かった。

太陽が昇るにはまだ時間がある。

僕はいった。

「夢をみたんだ」

そこには誰もいない、滋野新剛の布団の上。

「母親の出る夢……。知ってるとは思うけれども、僕の母親は僕が幼少の時に他界しているから……だから、母親はその時のままで……笑っていた。僕は成長して今と同じ体つきだから夢の中では母よりも僕のほうが大きい」

ふぅと軽く笑った。

「母は僕に優しく頬に触れると僕の目を見て嬉しそうに笑っていたよ、それ以上の感情があることは僕も見て取れたんだけど、分からなかった。母は速く寝なさい、ご飯できたわよとか、次のテストは頑張れるといいわね、なんてまるで子供扱い何だ、こんなに大きくなったのに……十年以上も経ってるのに……」

「僕を何時までも子供扱いするから俺は母にいってやったんだ。もう子供じゃない立派にここまで大きくなったんだよ、といった。すると母さんは、ほらハンカチ忘れてるよ、といって僕にハンカチを渡すんだ。そして、それを僕は受け取った。ベージュのきめの細かいシルクのハンカチ。刺繍がされていて女物だったと思う。すると、母さんの目の前で赤いロープが引かれて僕と母を区別された。母親は僕だけを見ていたが、僕は慌てふためいた。そんな様子を見かねてか、母は言ったんだ。ちゃんとハンカチもった？　そして僕は家を出てどこか知らない街について、あたりを見回していると……ハ

ンカチを無くした」
　それが一つ目の夢。
「次の夢は僕がおじいさんになっていた。母さんはやはり美しいまで生きていた当時の服と鞄を持っていた。
　母さんはどこか疲れたバスターミナルにいて、椅子に座りながら僕のことを探していたみたいだった、最初母を見つけるまではものすごく混んでいた待合室も車が来ると、どんどん人が減っていって、結局僕と母だけになる……僕は母の隣に座るとこんな話をした。
　多分この時にバスターミナルから家に風景が変わったのだと思う。家と言っても、今まで住んだことのない場所で、知らないところだった。真っ白い家で、机と椅子と暖炉しかなかった。
母はいった、人生っていうのは片付けたり汚したりの連続だって。それと、あなたは秋が好きでしょう、豊食の季節ですからね。でも私は春がいい……年をとると、なお分かるでしょう。　他にも色々な話を聞いたんだ。それから話が終わってしばらくすると、暖炉の薪がないといって母は外に出ようとした。扉の向こうはひどい吹雪だった。だから僕はまた今度、吹雪が止んでからにしたら、と言うと。直ぐに寒くなるから、動き続けなくてはならないって言うんだ。だから、僕がいくよって言うと。別に大した事じゃないから、暖炉の木の様子と水の点検をしてくれと行った。扉が閉まり母は外に出て行った。
　……僕には分かっていた。母が帰って来ないことを。
　そして、彼女がどんな時もこの家を暖めるために、居やすいようにしていることを……。
だから、彼女の言い付けを守らずに僕も扉の向こうに足を進めた、空は真っ暗で夜だとわかった。けれども雪の積もった大地は一面真っ白で家に点いていたはずの灯りが消えて、家がどこにあるのか分からなくなってしまった。
　雪原を進むに連れて自分がどこにいるのか分からなくなっていった。とにかく暗くて寒かった。吹雪が体に顔にとぶつかってきて冷

たく痛かった、自分自身の肉体も縮こまり、直ぐに家に入りたいと思ったが、家を見失ってしまって、どこだかわからない。周りには誰もいないから、ひどく独りだ。しかし僕は知っていた。僕の母は家の暖炉の火を強くして僕を待っていることを……。そして、母のいるに家に絶対辿り着くことを……。また、帰る道は一つではないということも知っていた……」

そこで目が覚めた……。

緑色の天使は終始話を聞いていたが何も言わなかった。でも、僕の隣に来て一度だけ頭を撫でた。

天使、緑色の天使。瞳と髪が薄い緑色。本名を知ることもなく、今のようにずっと黙殺する。行動も制限されたように、いつもこの部屋にいる。呼吸も鼓動もしない様にいつもいる。人形のような彼女。しかし美しい容姿とは裏腹に一切の性的魅力がない。だから、きっと天使なのだ。よくも悪くも天使だろう。色が緑色だから緑色の天使。

何も言わない。

けれども、いつもそこにいる。

……僕にはそれで十分だった。

僕が瞬きをすると掛け布団が少しだけ湿った。

今日も天使は何も言わない。

7、夢（後書き）

今後ともごひいき下さいますようよろしくお願いいたします。

目を通してくれてＫＩＩＴＯＳ！

8、駅（前書き）

そろそろ、大きな区切りになります

8、駅

０００

学校の帰り道。

僕と相戸夕は同じ駅に歩み出した。もう夕日が落ちようとする中。赤い大気が僕たちの影を身長の三倍に伸ばした。

駅は地下に埋まっていて、電車が通るたびに入口から通路にかけて風が駆け巡る。

行きと帰りの電車が交互に走る。

狭い出入り口だから、風は強いし早朝の混雑を招く。

朝であれば社会人に交じり生徒達も階段を上がり、風が吹き抜けるが込んでいるため、階段を上る女子生徒達はいつも後ろに手を回しているのだった。

一歩でもその駅に入るのならば、否応なしに、その雰囲気から感ずるところが僕にはある。

嫉妬に似ている。

古ぼけた白い光源が通路の左右で揺れていて仄暗い。小汚く、独特の薄い悪臭が漂う陰湿な構内。

床のタイルは元々若草色であったのだろうが、煙草の吸殻やガムのカスが両サイドに点在していた。

最早何の汚れかは分からない黒ずみが引き延びて、床全体に疲労感が覆っている。

天井もよろしくない、蜘蛛の巣は見られないが、ほこりの堆積と人間の吐いた息がびっしりと、こびりついている。

曲がり角付近には露骨な監視用のカメラがじっとりと過ぎ行く人間を観ている。

だから、僕はそっと彼女を、そっと見た。

彼女は僕の前を歩こうとはしない。
彼女の黒髪を悪臭が犯すのかと思うと少なからず思うところがあった。
この地下鉄はかなり深い所に在る。
だから空気も滞る。だから、この暗愚な悪臭の正体は人間の匂いなのだ。
改札はそれなりに多い僕はいつもその中でも左端のものを使う、右端からは電車から下車した者が集まるからだ。
僕たちは改札を抜け、電車の来るホームまでさらに階段を下りる。
改札からは一本道の地下鉄。
太い一本のコンクリートのホーム左右から電車が着て、僕は行きと帰りで進行方向が逆の電車に乗る。
中央には安っぽいプラスチックのベンチと、掲示板が幾つかあり行きと帰りを分けている。
雨でもないのに床のある部分は濡れていた。僕はそれをしばしの間だけ見つめていた。
ふと、相戸夕。
「ねえ、この駅って言っては何だけど。臭いわよね。貴方と同じ様な臭いがするわ」
電光掲示板が僕らの乗る車両が近づきつつある事を告げている。
「え？」
意識が彼女の方に向いた。
その時、僕達が乗る方向とは逆の電車が警笛を鳴らしながら到着した。
轟音が駆け抜ける間、何も聞こえない。
僕は薄暗い蛍光灯を見て一度だけ鼻をすすった。
「何でも無いわ」
「ごめんよ、最近鼻炎気味で」
向こう側の電車が止まると、彼女は僕を見て笑った。
ベルの音、雑踏の音、ドアの閉まる音、臭い。

僕は彼女、相戸夕を見つめた。
電車が出る、そして僕たちの乗る電車が二つの明かりをキラキラと輝かせながら、警笛と共に近づいてきた。
相戸夕はそのまま、電車の来る立ち位置までゆっくりと足を進める。
僕は目線を電車から正面に戻した……。
「え？　オイ！」と、僕。
「あれ、やばいだろ」
僕は何もいない空間に話しかける。
灰色の構内が狭く感じた。
相戸夕はホームぎりぎりの場所からさらに一歩を踏み出そうとしている。
彼女はゆっくりとそのまま止まることなく、線路に身を投げ出そうとする。
落ちる！
僕は飛び出していた。
「夕！」
かなりの大声を張り上げる。
夕は応じない。
周りの全ての動きがスローモーションになる。ヤバイ、“行動シロ”と言う脳の警告の高速伝達に反して、体の反応が酷く鈍い。
僕は右腕を精一杯伸ばした。
僕は地面を容赦なく蹴り飛ばした。
僕は目をいっぱいに見開き彼女を見失わないようにした。
僕と夕の距離は、およそ二メートル。不意打ちで無ければ手を伸ばして届くはずの距離であった。
夕の体が傾き、髪がふわりと踊り、転落の初期動作が始まる。
ダメだ。間に合わない。脳がフル回転する数センチ足りない事を予知させる。
僕の意識が相戸夕と狂気でいっぱいになる。

ああ、僕は、彼女を……。
頭が真っ白になる。
電車が通り過ぎる。
目の前が真っ暗になった。
ふとギシっと言う軋む音がした。
そこには……。
――『左手』には相戸夕の左腕があった。
彼女を抱き寄せて、その場に情けなく座り込んでいる僕と夕。
僕はたしかに右手で彼女を引き戻そうとしていた、けれども彼女は僕の左手に受け止めていた。
伸びきったはずの左手はすでに折りたたまれており、右手を添えて、両手で僕は相戸夕を引き寄せ抱きしめた。
「う、うう」
声が詰まった。
電車は完全に通過した。
両腕で確かめる。
これはここにいる。
「どうしたの？　痛いわ」
初めてあった、親戚との開口を思わせるあまりにも無垢で他人行儀な幼い少女の一言。
僕と彼女は確かに他人だけれども、はじめから相戸夕は僕の事を他人行儀には扱わず、よくいたずらにからかう兄弟にもにた雰囲気で話しかけてきた彼女からこんな声を聞くことになるとは思わなかった。
微睡んでいる彼女は僕を見上げる形になっていた。
「と言うか、何処触ってん……」
相戸夕は言い淀む。僕に横胸を触られているにもかかわらず、平手打ち様に準備していた手を止めた。
羞恥心のせいだろうか、彼女は少しだけ頬をあからめて、それでも表情自体は変化せず、無表情に僕をみて言う。

「私、こうなる直前の記憶が無いわ」
目と目が合った。超至近距離で、頬を赤くした少女の顔は可愛らしかった。
彼女の体は温かく、柔らかく、何にも増して良い匂いがした。
「よかった」
そのまま僕は彼女を抱上げようとしたが、ここで僕は彼女の頭突きを顎に食らい。彼女は僕の手を離れた。
「調子に乗るな」
そこの少女の面影は……多分。
「……ごめんなさい」
すこしばかり行き過ぎた電車がホームに戻り。お詫びのアナウンスを入れながら扉を開いた。
僕が下ってきた階段のほうを見ると、「何をしているの？」と相戸が僕を促した。
電車に足を踏み入れる。
車内も快適とは言えない、混みようは座れるか座れないか位で、何駅か通過すると地上に出る、そうなると、この車内の人間臭さも緩和されて気にならなくなるのだ。
彼女と別れて、僕は家についた。
部屋に入ると天使がいた。
何も言わない天使。
緑色の天使。
いつもと同じ僕の「ただいま」にも返答はない。本当にこれはいつものことだ。
話を続ける。今日あったことを。
まだ彼女が話す頃、口を酸っぱくして言われた事。『関わるな』といった彼女との約束をよもやこんな短時間で破るとは思わなかった。
彼女が教えてくれたことは、珍事はどこにでもあるということだ。
身近すぎるから気付けないし、相手だって馬鹿じゃないから気付

かれないようにしている。でも、もし一度でも知覚されてしまったら、いや、知覚してしまったら。
『貴方』は死んでいる。
今まで生きていた世界から隔離される。二度とそこには戻れない。
それでもいいと思う人もいるかも知れないが、実際それはかなりキツイ。
人と違う道は個人の実力勝負になるし、求められる能力の規模は莫大だし、種類も異端で歪なことが多い。
相手に感知されるということ以上に、自分が知ってしまうことの方が手に負えない。
どうしようもない、詰みの状態。
だからもしも少しでも、今よりも悪化しないようにするのなら、留まりたいのなら。
知らないふりをして、無視をするしかない。
決してそれで良いというわけではない。上手な対処法など無い。
底なし沼に嵌って暴れるとますます沈むのと同じだ。動かなければ沈むペースを遅く出来る。　けれども確実に嵌っていく。
そんな時は絶対に誰かの助けが必要だ。
独りではどうにもならないから、先駆者に助けてもらう。信用できる相手ならばどんな時も一緒に組みたいと思う。
だから、彼女は『関わるな』と、いってくれたのだ。
「天使、聞いてくれ」
そんなことを言わなくても、彼女は一方的に聞いてはくれる。
彼女はいつも僕の話を聞いてくれる。
下を見ていた天使は顎を上げ僕の目を見た。緑色の瞳が綺麗だった。
とろんとした美しい、ろうかんを思わせるような翡翠の瞳は溶けて今にも零れ落ちそうだった。
助け舟を自分自身で壊しておきながら、にもかかわらず……また助けてくれと頼む。

……そのための進言である。
天使は一度だけ首をかしげて同意をした。
話す内容は今日の帰り道。相戸夕の事だった。彼女は気づかなかったのかもしれないが、彼女をだきよせたあの時、階段の上から一人、階段を降りずにいる人間がいた。僕達と同じ制服脚部だけが見えていた。顔までは確認できなかったものの単調な動きをするあの環境の中で、変わらずに階段で待ち続けたあの女の行動は少し引っかかる。
自分から首を突っ込む、ごめんね。
天使は何も言わなかったが、心なし寂しそうな顔をしていた。
「……僕は、いくよ」

8、駅（後書き）

続きます、続きを読んでくれると嬉しいです。

Спасибо！

9、兎の日（前書き）

ここまで読んで下さった皆様に感謝。
功徳のある方たちだと思っております。

9、兎の日

０００

「ちょっと話したいことがあるの」

授業が終わってからの相戸夕の言葉だった。

あの体育の日以来僕たちはよく話をするようになった。主に放課後。それは当然で授業中は基本誰しも授業を受けていて、唯一と言って良いような会話の場は化学実験の時でそれは出席番号で決まっているから実験班としか話さない。昼休みは男友達と一緒に弁当や食堂でランチを取る。

だから消去法で残るのは放課後、部活をやらない僕は家に帰っても本を読んだりゲームをすることがほとんどなので断る理由もない。もう日課になってしまった事だった、放課後。相戸夕と一度教室から出て近くの階段を椅子代わりに、大きな窓から夕陽を見ながら話していた。

然しながら今日は休日であった。彼女の一方的な呼び出しに、僕は学校まで足を運んだのだ、きっと何か学校行事の手伝いか何かの協力だろうと思いながら。

「そう言えば、どうして僕には毒……他の人には言わない様な事を言うんだい？」

「貴方ならば良いかなって思えたのよ、私、見る目はあるのよ。だって実際貴方は誰にも言っていないじゃない」

相戸夕は口の前に丸めた手を当て頬杖を付いた。そして大きな窓ごしに夕日を見ながら、僕の話を聞く準備をした。

「言える訳ないだろ。言っても誰一人信じないだろうし、その結果クラスにいる半分の女子に白い目でずっと見られ続けられるリスクを背負う、僕に得が無いじゃないか。何よりも僕もこういった話を女子と話すのが新鮮な感じが嫌いじゃないし、話すのが楽しいから、

この友情関係を壊すような事はしないさ」
「なんて言うか……長話のわりに内容が薄っぺらね。正直がっかりだわ、私貴方を過大評価していたのかも知れない……訂正しないとね」
と、言って。彼女は一回区切った。
「詰まらない貴方に私から貴重で斬新なアドバイス」
嫌な予感しかしねえよ。
「いっそ、クラス中の人間から軽蔑されなさい、そうだ、良い案があるわ。明日は全裸で登校しなさい、よくネタとか笑いの種としてはありがちだけど実際にやった人はいないはず……ｙｏｕ　ａｒｅ　ｔｈｅ　ｆｉｒｓｔ　ｏｎｅ．」
ビシッと人差し指を僕の眼球数センチ前まで突きたてて、そして何故か英語で言われたのだった。
貴方が最初の人……日本語にするとなんと甘美な響きなのだろう。
そんな事を実際に言われたいと言う正直な欲求が僕には今までであったが、今それが砕けた。
違うだろ、その甘美で切ない男性にとっての希望の言葉は、もっと何て言うか、こう……恥じらいと好奇心とが九対一でブレンドされて、頬を染めながら可愛らしく言って欲しかった。
そういうシチュエーションで聞きたかった。
そんな考えをコンマ一秒で纏め上げ、僕は反論した。
紳士である僕が反論をしたのだ。
「僕はそんな変態じゃねえよ」
「貴方がその言葉を吐く直前の思考を読む限り、結構な変態よ。妄想に取りつかれた異常者と言ったところね。女性から見たら……」
「お前はエスパーか！」
「馬鹿ね、貴方童貞でしょ」
馬鹿呼ばわりした揚句、なんとこの紳士を童貞呼ばわりしやがった！
まあ否定はしないさ、どのような事であっても最初から否定せず

受け入れる精神を持つジェントルメン、そう。それがこの僕、滋野新剛。
寛容の精神。
そんな内なる最終防衛ラインを作りながら彼女の眼を見ると……。
彼女の眼が輝いていた。さすがドS、どんどん追い詰められているぞ僕。駄目だ、このラインを越えられたら僕は自分を保っていられなくなるかも知れない。そうこの後ろ、振り返ればはそこに在るのは崖なのだ。頼むこれ以上貞操にかかわる発現を止めて頂きたく存じます。
崖の上だ、今僕が立っているのは崖の上なんだ、いわゆるポニョなんだ。
どうしようもない男が崖の上から決心をして靴を揃えて躊躇っている時、足元になんだか気味の悪いポニョっとした物体が今の僕だ。
そして彼女は追撃を開始した。
「貴方、童貞でしょ」
「なんでそんなことまで分かるんだよ！」
死の直前僕が思ったのは、家族の事でも、童貞の事でも無く。なぜと言う疑問であった。
「『何故お分かりになられるのですか美しい相戸夕様』ですって？
だから貴方は愚昧なのよ。これはね」
そう言って彼女は唇を僕の耳元まで近づけた。
もうそれは僅かな温かい吐息がうなじにかかる程に……。
そして、囁く。
「女の勘よ」
――そんな馬鹿な！
「それから、貴方の女性を見る目つきね、女の子はねそういうものにとても敏感なの」
あってたまるかそんなこと！　それでは年頃の男の子の視線の持つ熱量に女性はみんな焦がされてしまうじゃないか！　特に胸を。
そういえば、筐体（きょうたい）ってエッチな言葉だと思ってました。

それなのに僕に胸を焦がす生徒は今のところ皆無である。チョコをくれ！　……いや違うな。
ふっ、と僕は何故かニヒルな笑いがこみ上げてきてしまった。……泣きたい。
いや、ちょっと待ってくれよ。男とは女の持つ重力に魂を縛られている人だ。
僕は断言できる。
だから決して僕個人がそう言った、女性の局部を重視したい訳では無い。
そもそも男がこの様に出来た理由は一つ。攻めるためである、最初のモーションは女性も男からして欲しい。だから神は女には小高い希望の丘を与え、男にはミサイルを授けた。神がお与えになったミサイル。
もう一度言おう。神がお与えになった正直者、男を導き時に誤らせる特異なミサイル。男がその重力に縛られているのは、夜の兄弟が勝手に臨戦態勢をとろうとするからである。時にマグナムと言うが、僕はミサイル派。
そうだ、男女は共に最初はフリから入る、互いの求める役割を演じている。一種の求愛ダンスの様なものだ。見るという行為に罪は無い。だからこの国でさえも女性の制服にはスカートを指定なさった……僕は何の話をしているんだ。
ふう、やれやれ。クールでかつ、いけている僕とした事がついつい取り乱してしまったぜ。
女の勘だって？　確かに相戸夕は俗人ではない、これは事実だ。
そして、僕はこれから細心の注意を払って女性の胸を見なければならない事は必死に必至である。そう、僕の男の部分がそう告げている。しかし同時に彼女はミスを犯した。それは僕に視線に対する敏感さを知覚させてしまったと言う事だ。
これで、人目を気にせずに注意して視姦できるぜ。……あれ何かが引っ掛かるぞ？　まあ良いか。

そうだ彼女を見る時は、熊公八公ではない彼女を見る時は油断は禁物だ。
油断するなよ僕、彼女は只者ではない。
――そうか！　僕は今、彼女の事を只者ではないと思った。この分かり方が無意識の内に反感になる。そうかこの分かり方がオールドタイプと言う事なのか。
女性は皆ニュータイプ（男の視線限定）みたいな。
僕はこの今日と言うこの日に二つの人類の革新と心理を見たのだった。
「なに馬鹿な事を考えているの、卑しい犬が！」
彼女の軽く嘲笑う目線が僕の男として生まれた究極にささる。
若干、相戸夕の顔から血の気が引いている様に見受けられる、それ程きっと彼女は僕を見下しているのかもしれない。
ドン引きと言うやつだ。

彼女の長めの髪が最後の夕日に照らされて、甘いにおいを放った時、事態が変化した。
空には早くも月が昇っていた。
その月は濁った光を誰にも気づかれないように放っていた。

「それから、私ね、貴方に言……っいた……痛い……」
突然、彼女は頭を押さえながら、その場にうずくまってしまった。
強化人間なのか？　と一瞬と惑った。
「馬鹿、違う、あのね……貴方をね……」
空気が変わった。
風が吹いた……気がした、それは首元に。
一瞬、僕は彼女と関係のない教室の方を見てしまう、僕のクラス……。
虫の知らせ。
駄目だ、まずは彼女をどうにかしないといけない。

つい先刻より、夕の顔色が悪い、いや、異常だ、こちらが青ざめてしまう程に顔は青く変色している。
僕は全身が冷え込むような感覚と、腹に直接炎を炊かれた様なアンバランスな感覚に襲われた。
「ちょっと待ってろ、保健室」
言い終わる前に僕は夕を抱き抱えていて、すでに保健室に向かった。
普通じゃない、普通ではないのだ……。
辺りを彼女、相戸夕ではない他の何者かの甘ったるい空気が支配していた。
異界。
何故気付けなかった。
相戸夕は既に僕の胸の中で御姫様だっこ状態である。僕の手が触れている彼女の皮膚からはどんどん体温が奪われている。こんな短時間にあり得ないほど彼女は冷たくなっている。
無論、進む先は保健室。
「私ね、こう言うのには敏感なのよ、でも抵抗力が無いから、普段は気配がしたら逃げるのに……きっと滋野君とのお喋りが楽しすぎたのね」
「いいから、後でいくらでも話は聞くから、頼むから今は喋らないでくれ」
「貴方といると、本当に楽ね」
真っ青な唇が動いた。
僕は彼女の告げる言葉の全てを聞き、全てを理解できないまま、ひたすら突き進んだ。
言い終わると彼女はそのまま静かになった。
「ああ、頼む、お願いだから。頼む、頼むよ、頼む、……頼む」
何を言っているのか分からない、こんなに混乱をしたのは初めてだった。
冗談じゃない。

階段を下り終わり、保健室の扉を足で乱暴に開け、相戸夕をベットに横たえシーツをかけたた。彼女は目を瞑っていた。
僕と相戸夕以外誰も居ない。
まさかと思い、首に手を当てながら、胸の上下運動を見る。
生きている。
どうやら気を失っているだけの様だ。
暗がりの保健室は彼女を一人にするのはあまりにも悲しく、寒々しい。
ほんの数秒だけ彼女を見てから僕は自分の行くべきと信じる所に向かう事にした。
そして、何も無い、誰も居ない空間に向かって僕は願い事を呟く。
「頼む彼女を……相戸夕を、守っくれ」
僕はハッキリと独り言を言ってから、その場を後にし、原因の元に足を運んだ。

外は既に深夜の様に暗い。
早過ぎる夜が生じるのは大抵、人間にとっては凶事の前兆だと、以前の天使は言っていた。

今教室にいるのは何だ？
兎に角、ずっと放置していた、異界の主に会うしかなかった。
「ごめん。……、俺は行くよ」
相戸夕から視線を切って、背を向ける。
保健室の扉を閉めて僕は走りだした。
階段を三段飛ばしで駆け上がり、目的のフロアに着く。
そして、いつものクラスの扉を観る、何の変哲もない見慣れた板、しかしそんな見慣れた校舎の一部には誰も見たことの無い様な光景があると感じた。
まだ少し馴染んでいない空間に僕は足を踏み入れる。

窓から入射する濁った月光が鋭く眼球を突いた。

9、兎の日（後書き）

つづく

そして、今回も読んでくださってＧｒａｚｉｅ！

１０、君の幻想を使って　０（前書き）

ここからが本編の開始です。

１０、君の幻想を使って　０

００７

夜への扉を開けた。
その扉は一切の静寂でできている。
その扉は一切の静寂を内包する。
その中は静かで、本当の安らぎが……眠っている。
音は無く、光もない、わずかな花の匂いがある。
その中は静寂に包まれ、時に己の心臓の鼓動でさえ五月蠅く、不快で、気味悪い。
故にいずれは皆、静寂に帰るのだ。

その教室には緊張の糸が張っていた。まるで初対面の人間の面接の様だ。
あるいは初デート前の待ち合わせ。
どちらかと言うと、この場合は後者の空気が近いのかもしれない。
そこにいる二人は若い男と女、そしてここは学校なのだから、きっとそうだろう。
しかしながら、気まずさも無い、お互いに。
滋野新剛の目の前には、一人の女が立っていた。
少女と言うには大人びていて、『女性』と言うにはまだ若い。
少女と言うには余りにも面妖な雰囲気を醸（かも）している。
教室の両端、対面（といめん）、その女はクラスメイトで……よく知った女だった。
窓から空を仰ぎ、その白い肌に淡く怪しい月光を浴びせていた。
女は現実の教室に潜む闇に溶け込んでいて輪郭も曖昧であり、夢の中の出来事の様に幻想的で誰にも気づかれない程度の整合性の欠落があった。

学校指定のブラウスと、短めにカスタマイズされたスカートしか着衣していない。
よく見ると女の体は濡れて、服が体にぴったりとその体に張り付いていた。
汗。
遅れた来訪者に意識を向ける為、女は窓から顔を外し、スカートをふわりと円舞させ、振りむき、しばしの間、男の左腕だけを見ていた。

滋野新剛は口をひらく。
「加藤菜月さんだったのですね」
空には月が出ていた。それは満月である。
菜月はゆっくりと剛の顔を覗いた。
「……」
何も言わずに、ニタリと菜月は笑う。窓からこぼれる月光を受けた口もとの歪みは既に人間のそれでは無かった。
暗かった。ただ、印象としては暗かった。月のせいなのか、その笑顔は暗かった。
月が作った彼女の影もその笑顔に合わせて大きく、揺らぎ、裂けて……そして消えた。
影が消えた。闇に溶けた。
それから。
彼女の頭から白い物が伸びる。それは、長く、細く、そして、しなやかに弧を描く。
耳だ。
それはウサギの耳だった。
瞳は深紅に染め上げられる中で、彼女は、歪な口調で言葉を紡いだ。
「私……はどうする事も、できない……の」
それが加藤菜月の最後の言葉だった。

心からの健気な少女の告白であった。
そして、目の前の『誰か』が、もう一度嗤った。
それ自体がデスマスクに思えるうそ寒い嗤い。
何も感じない、いや、何も感じていないのだろう。
彼女の死んだ後の顔で、彼女が死んでからの顔、生きる者はまだ知らぬ、何かに変わり果てた顔。
悪魔じみていた。
その笑顔に制服越し寒気を催し、粟立つ肌の感触を滋野新剛は味わった。
前進するでもなく、後退するでもなく、互いに一歩も動かず、見つめあい、呼吸を確かめ合った。
滋野新剛の脳裏には昨日の事の様に思い出させる。
あまりにも現実離れしている為遠いと錯覚してしまう春休みの記憶が蘇った。
彼は――。
方法を一つしか知らなかった。
方法は一つしかなかった。
異界を止める方法。
相戸夕を救う方法。
これから自らが成す事を信じる決意をする。
それを形にする為に、目的を告げるために、剛は口を開いた。
「お前を殺す」
（ごめん）
剛の統一できない精神に心が引っ張られ、思う所があった。
互いを縛っていた空気が一気に緩み、再び濁った。
彼女の肩口から月がその顔を覗かせていた。
開戦の合図。

１０、君の幻想を使って　０（後書き）

つづき

１１、君の幻想を使って　？（前書き）

長々と、お付き合いくださってありがとうございます。
引き続き目を通して下さると幸いです。

11、君の幻想を使って　？

両者の距離は、そう。ちょうど五メートルぐらいだ。
月光が教室をよく照らしていたため、夜にもかかわらず、お互いの姿はよく見えた。
剛が両腕を軽く折りたたみ、左足をやや前に出した。ボクシングで言うオーソドックススタイルである。この時、彼の右手が左手に比べやや下がっているのはアッパーカットの準備と、動きの鈍くなりがちな横腹を守るためでもあった。どっしりとした構えだった。対照的に。
ポーン、ポーンとウサギは軽く飛び跳ね始めた。
両手をだらりとぶら下げた自然体で、単調で軽快なリズムを刻む。そのリズムは次第に遅くなり始め、前後に左右に軽く、浅い跳躍を繰り返す。それに合わせて腕と耳とが揺れ動く。
剛が見ているのは手や耳ではなく、足と胴体であった。そして故意にそのリズムに乗らないように努めた。
深呼吸の様に空気を吸って吐いたウサギは満月の晩に跳ねた。
ポーン、ポーンとリズムは刻まれる。
ふぅー、と思いっきりウサギの形をしたそれは息を吐いた。
ポーン、ポ……。
――刹那、リズムが変わった――。

リズムの終了は突撃と同等の意味合いがあった。
あまりにも静かな夜の中、突然、雷の爆音が校内を駆けるような錯覚を一方的に押しつけて。ウサギの悪魔は弾丸のごとく弾けた。
悪魔は右手を固く握り、飛びながら突き出している。そしてその狙いは寸分たがうことなく剛の脳天に向けられている。
剛は息を思いっきり吐きながら、体を右に捩じり、さらに左手を背負い投げの様に突き出した。

悪魔の放った顔面への一撃は異常な風切り音を生みながら空を切り、その代わりに剛の左手がウサギの顔面に命中した。
「うううぅー」
剛は唸りながら、今度は半歩にも満たない踏み込みをし、相手の土手っ腹に肘を突き出す。
ミチミチ、という肉と骨が軋む音を出しながら、ウサギは剛の左手に吹き飛び、壁を粉砕し、瓦礫を巻き上げ、ドラム缶を屋上から落とした時の様な音を出して、壁の向こうにある生徒用のロッカーに人型のマークをつけた。
普通の戦闘ならばこれは十分すぎるほどの決定打だったが、内心、剛は焦りと不安を抱えていた。
――速い。
相手は飽きれるほど速い。
初撃の左は初期動作の確認できたため、避けるついでに当たっただけで、肘鉄は今までの習慣からくる一連の動作だった。
決まってくれ。そう思いたいのとは裏腹に、絶対に立ち上がるという確信が存在した。こんなので終わるような相手ではない。
左手には何の感覚もなく、温かくやわらかい感触が僅かに剛の肘に纏わり付いた。
油断は無い、すぐさま剛相手に対して左足を前に出し、粉砕された壁の方を睨みつける。
ウサギは面倒くさそうにロッカーの鉄編を払いのけ、当然のように立ち上がった。ひとつ咳をすると周辺に血だまりが出来た。
しかし、その顔は嬉しそうに笑っていた。
「……ふ、ふふふふふふ」
身も凍るような不気味を通り越した恐怖の嗤い。
タン、タン、タン、タン。
ウサギの悪魔は別のリズムを刻む。
片足ずつのステップ。
タン、タン、タン、タン……ダンッ。という巨大な音とと

に、ウサギの足場のタイルが粉々に吹き飛び、再びリズムが途切れる。
今度は風切り音と同時に今度は右ひざが飛んできた。
剛はその右膝を思いっきり左手で撃ち落とし、同時に右手で相手の喉元を掴み前進、払いのけた。
結果、相手は後頭部から地面に激突した。
直後、滋野新剛は悪魔との距離を取る。
剛の左手の感覚が無くなり始めている。
口の中が苦い、そして、剛は極度に高揚していた。
暗さになれるため広がった剛の瞳孔がさらに開き始めた。

１１、君の幻想を使って　？（後書き）

感謝いたします。

１２、君の幻想を使って　？（前書き）

すぐに次行きます

12、君の幻想を使って　？

――夜はまだまだ続く。
静かな夜。泣いていた虫は黙り。
月の川の部分が次第に広がり始める頃。
ダン、と言う大きな音がした。
剛の意識が一瞬、そして確実に飛んだ。
何だっけ？　思った。
見えたのはウサギの背中。
攻撃を受けてしまった。
つまり、受けたそれは体当たりだった。
高速の体当たり、と言うか両足を揃えての跳躍。
相手は中々持っている引き出しの数が多そうだ。
互いの感想はそれであった。
最初と次の攻撃は、体当たりと突きの組み合わせであった。人間がその攻撃を行った場合、当たれば牛も倒せる程の威力はでる。まさに必殺の一撃である。
当然、件の悪魔は、一撃で殺りに来た。しかし、結果としてそれにはカウンターをあわせられ、そして次にウサギは剛の一撃が偶然かどうかの確認に蹴りを再び放ってきた。

そして次は体当たり――だった。

ウサギの悪魔は自身の急所を腕で守りながら、背中をぶつけてきた、しかも初撃よりもずっと速かった。
とっさに左腕を剛の前に、右手で左手をフォローする様に腕で十字を作り、威力を殺そうとした、しかしそれは意味をなさない。
剛は吹っ飛んだ。背骨を黒板脇の壁にぶつけ、建物が軋む錯覚を受

けた。
「うう……」
ウサギは滋野新を一瞥すると、面倒そうに辺りの机および椅子を両腕で吹き飛ばし、中央にちょっとした空間を作る。
周囲を見回すともう既に教室はめちゃくちゃな有様であった。まともな机は殆ど無く、鉄パイプは曲がり、椅子は所々が欠け、壁には二つの大きな穴があいている。
はぁ、これがばれたら大変だなと、頭に回った血が減り、見当違いな感想がふと頭に過る。そして自身の体が誰かの借り物のように眼に映った。
清々しい程のやられよう、たったの一撃で死に近づいた。
ゴバッ。
肺にあった空気が逃げ道を求め、同時に通路を邪魔していた血も押し上げられた。
剛は口から血液を吐き捨てた。と同時に己の肉体の損傷具合を確かめる。
極度の興奮でドーパミンが異常放出され肉体の損傷に比べれば痛みは大したことは無く、無論気絶も出来なかった。
背骨は折れてはいなさそうだが、肋骨は折れてしまった。また、右腕は使い物にならず、右足も本来曲がるハズのない方向に曲がっていた。
しかしながら、それにもかかわらず、左腕は健在だった。
何かを確信した様な目つきでウサギは言葉を紡ぎだした。
「そして、わたしは」
その口調は優しく親切で、特に何よりも敬意がこもっていた。
ウサギはゆっくり近づいてくる。
「決して死を恐れたりはしない」
誰かに向かって告げている。
たどたどしい言葉だった、誰かに何かを伝えたくて必死になって身につけた様な稚拙で敬意を持つべきと確信させる言葉だった。

ウサギの両足がさらに伸び、身体には、しなやかさを孕んでいった。
「それに、理由は無い」
それはまるで誰かに質問をしている様だった。
「もしこの囁きが聞こえるのならば……」
このウサギは完全体になろうとしている。
「貴方は死んでいる」
剛は壁からずるずると剥がれ落ち、そのまま座り込む形をとった。
滋野新剛の全身が粟立つ。
それは恐怖からでは無かった、彼の悪魔の紡ぎだす言葉は真実であった。
本心。
人間でいる期間、人と人とはそうそう、互いの腹の内を見せたりはしない。嘘と欺瞞、、憎悪と嫉妬、それらの悪意を聞く事はあっても、自身の弱点を晒す者はいない。
そう彼滋野新剛は件の悪魔に魂の世界で押されているのだ。
そして前方にいるウサギを見上げた。
ウサギは真っすぐと瞳を覗き込み。最後の言葉を紡いだ。
「私は一度も言えなかった、私は……怖いのだと」
ウサギの頬から水が滴り落ちる。泣いていた。
そのまま、当然の様に己から屈(かが)み、両手で丁寧に剛の左手をとって、しばしの間眺めてから。
そして左手の甲に優しく接吻をした。サラサラした、ひんやりとした肌触りだった。
人間の肌の感触では無かった。滋野新剛は今さらながら、『嗚呼、彼女とは本当にもう会えないんだろうな』と、思った。
その言葉を聞いていた剛は何故か『懺悔』という言葉が思い浮かんだ。理屈は分からないが、その口調と仕草とは、まるで神への告白であった。
ウサギが恭(うやうや)しく左腕をもとあった位置に戻す。

すると剛の左腕は忽ち光を宿した。僅かに赤い光を。
「これは……」
――その斧は三ビルドゥある。
大なる武器であった。
悠然とそして墓標のように、剛の目前にそれは突き差さていた。
この斧は数週間前の春休みに一度だけ、剛が左手で用いた事のあるものだった。
結果的にはこの斧により、彼は死地乗り越え、刃向かう全てを消し去った。
「どうして……」
剛は有りっ丈の力で手を伸ばし、斧に手をかけた。
「手、足……てか全身死ぬほど痛いけど……」
剛は立ち上がった。否、斧が座ることを許さなかったのだ。
剛はもう一度だけ咳をして、口に溜まった血を吐きだした。
そして、杖代わりにしていた武器を、斧を振り上げようとした時。
――音がした。

１２、君の幻想を使って　？（後書き）

お読み下さった事を厚く感謝申し上げます。

１３、君の幻想を使って　？（前書き）

これにて　ひと段落となります。

13、君の幻想を使って　？

ドン、ドドン、ドン、ドドン。ドン、ドドン、ドドン、ドドン……。
今までとは違う心地のいい響きであった。そして悪寒。
浮かぶ月は闇にその身を喰われて、空は星も見えぬ暗黒で形成されていた。
ドン、ドドン、ドン、ドドン。ドン、ドドン、ドドン、ドドン。
あの音が次第に大きくなって来る。
「フフフフフフ」
ドン、ドドン、ドン、ドドン。ドン、ドドン、ドドン、ドドン……。
「ハハハハハハ」
ドン、ドドン、ドン、ドドン。ドン、ドドン、ドドン、ドドン……。
「フフフフフフ」
ドン、ドドン、ドン、ドドン。ドン、ドドン、ドドン、ドドン……。
「ハハハハハハ」
その声の主は笑っていた。その笑い声はどんどん大きくなって、響く音に合わせて、愉快でも皮肉でもなく、ただの笑い声を形成している。それも音であった。
ドン、ドドン、ドン、ドドン。ドン、ドドン、ドドン、ドドン……。
この地響きのような音は僕を高揚させる。
「あああああぁぁ、あぁあああああああああぁぁ、ああ」
一瞬の女の悲鳴。
悪魔はその身を大きく反り返らせると、背中からは大きな黒い双翼が生えそろった。
（この高なる音……）
悲鳴を最後に全ての音は、その役目を終えたように終わり、この世界から五感の一部をえぐり、切りだして眠った。
夜。

そして滋野新剛は一つ呟く。

「ああ、そうかこの音は、僕の心臓の音なのか」

その音は、僕の声は三人しかいない校舎にはよく響いた。

ウサギが翼を数度羽ばたかせると、辺りの光が黒い翼に喰われて切り取られたように、その空間は暗くなった。

そして加藤菜月はいなくなった。

ウサギはその時ここぞとばかりに跳ねた。ぴょんぴょん跳ねた。天井を壁を、黒板を机を、ありとあらゆる平面はウサギの地面であった。跳ねる回数に比例して、ウサギはどんどん加速していく、最早、剛の動体視力では追いつけない。

今や、剛の肉眼は悪魔の本体を追う事を諦め、影と残像を見る事しか叶わない、しかし、それもあと数度跳ねれば重なる加速により不可能となる。

翼の軌跡は闇として空間に刻まれ続ける。

闇が広がる。

剛に恐怖は無かった。

加速と運動の激しさを全く無視して、机や電球を足場に跳躍してもそれらの器物は一切動かず、又、音が聞こえなかった。

平面を蹴る音も、高速で生じるはずの風切り音も――。

闇の中では聞こえない。

そこは一切の静寂であった。

今までとは段違いの跳躍と反射スピードもう誰にも何も見えない。

跳躍を超えた飛行。

飛行を超えた消失。

にもかかわらず、だが、そこには消えた彼女の残り香があった。

僅かな匂いをかぎ分けられたのは、静寂のせいかも知れないし、それが引き起こした安寧のせいかも知れない。又はもう既に一切の

光が喰われてしまったからかも知れない。
それから……時間が流れた。数十秒、数分か、数十分だろうか、この闇の中では時間の感覚は麻痺してしまう。
穏やかな時間の中で、滋野新剛は自身の脈打つ心音が耳触りだった。
ドクン、ドクンと一つ一つ音を出す臓器が狂っている。
何も無い闇では自分はどこにも居ないということがよくわかる。
この世界には不相応である。
どこから、いつ、どのように、己を襲うであろう危機と恐怖を実感する。
普通ならばそのまま押しつぶされてしまう、けれども剛は違った、それを容赦した。
それでも、よいではないかと、ゆるした。許して赦す、赦してから許した。
そうすれば、自分もゆるされるきがしたからだ。

暗黒の中で剛は目を瞑った。何も変わらなかった。
ドクン……ドクン……。
静かに滋野新剛は自身の全てを他力に任せた。
そしてそれは、突如終わった。
ゆっくりと、滋野新剛の視界いに血の赤が広がった。
……目を開けると。
闇が光を内包し始め景色が帰ってきた。
剛の目の前のはウサギの悪魔が背を向けて立っていた。
ウサギは、赤い瞳をガラス越しに空に目を向け、大きく翼をはばたかせた。
そして、こちらをもう一度だけ、悲しげに振り返ると。そのままガラスを突き破って、つい先刻まであった、月の方へ飛び去ってしまった。

（何も言ってはくれないのだな……）
その場にはそんな音が響いた。

１３、君の幻想を使って　？（後書き）

ご健勝とご繁栄をお祈り申し上げます。

１４、それから

００９

砕けたガラス片は床にも落ちキラキラと輝いている。
僕は――斧から手を離し、それに背中を預けた。
しばらくの間は動けなかった。考えていたし、答えが欲しかった。
闇が晴れ、空に月が帰ると、その月は赤く輝いていた。
そんな風景を楽しんでいる僕。
常人よりは遥かに頑丈で、治癒能力の高いこの身体は痛みを伴いながら、再生を始めていた。
動けないな……全く。と嘲笑の念を持ちながら言おうとしたが、ひゅーひゅーという異常な呼吸音にしかならなかった。
結局、僕がやった事は、教室をボロボロにぶっ壊しただけなのか……いや、相戸夕はこれで苦しむ事もないだろう。
悪魔は去ったのだから。
滋野新剛が目を瞑ろうとした時、ガラガラという音を出しながらドアが開いて、緑の天使が現れた。
ぼんやりとしている僕を見つけた緑の天使はそのまま僕を見下し続けた。
僕が冷たく凍りつく目線を浴び続けていると、月はその赤い光りを一層強めて、さながら真夏の夕日のようだった。
ずっと見ていたかった。
その光は温かく、穏やかで……。
光を浴びながら昔の事を思い出す。
死んだ母親の思い出。
昔の思い出。
昔……。
買ってもらったウサギに一緒に餌をやった事。

昔……。
公園で一人きりで遅くまで遊んでいて、迎えに来てくれた事。
昔……。
夕日の中で繋いでいた小さな手をほどき、太陽にそれをかざした日。
昔……。

何も言わない天使は僕を見守っている。
僕には多くの昔があった。そんな当然のことを受け止めながら時間が流れる。

――それから、空には大きないつもの金色の月が帰ってきた。

15

０００

悪魔との戦いの傷が癒えて体が全快するには五分程度の時間を要した。

制服はボロボロ。所々で血が固まり、部分的にカピカピになっている髪とワイシャツ。

とても人前に出るような格好ではないけれども、僕は階段を下ったその先にある保健室に向かった。

保健室に入ると、相戸夕がベットに腰をかけて僕の帰りをまっていたかのように、こちらを見ていた。

待ち構えていた。

部屋は暗かったが、良く彼女の顔が良く見えた。表情はいつもと変わらず僕に見せる無表情だが、その皮の下は怒っていた。

僕には分った、表情なく彼女は僕を睨んでいる。

「滋野君、どこに行ってたのかしら」

彼女は攻める様な責める口調で続けた。

「貴方は馬鹿だから忘れているかもしれないけれども、私は可愛い女の子なのよ。そんなかわいい少女が気絶したと言うのに、こんな所にほったらかしにするのはどうかと思うわ」

「ああ、すまない、ちょっとどうしても行かないといけない用事があって……」

「謝りなさいよ」

「ごめん」

「謝罪しなさい」

「ごめんね」

「言い訳はよしなさい」

「はい、すいません」

一瞬、相戸はそれまで僕の眼球を睨みつけていた逸らして告げた。
ためらいがちに。
「……用事って何？」
なにか間違いを起こした子供に許しながら、過ちを問う優しい母親のような口調だった。
僕にはそれが辛かった。
「……」
僕は下を向いて……何も言わない。
いいや違う、言えなかった。涙がいっぱいに右目だけに溜った。きっと今話をしたら、噛むどころじゃない、嗚咽に似た声しか出ないだろう。そんなカッコ悪いのは、嫌だ。他の誰でもない相戸夕の前でそんなカッコ悪いのは嫌だった。
「貴方の事だからきっと良い事をしたんでしょうね。いいえ、良い事をしているつもりに成っているのでしょうね。分かっているわ。……お疲れ様」
良い事をした何て思ってはいなかった、怖かった。
ある種の脅迫じみた恐れが僕を突き動かしたに過ぎない、そうでなければずっと放っておいただろう。
失う事は無くとも、その可能性を見せつけられて僕は冷静では無かった。
今はそれが、たまらなく……おぞましい。
彼女は決心したかの様にもう一度、言葉を紡いだ。
「理解（わか）っているわ」
僕は相戸夕を見た。
彼女は今まで座っていたベットから立ち、僕の眼を見て言う。
「ねえ、アダムとイブが禁断の実を食べる話は知っているでしょう？　あれって本当に罪なことなのかしら？」
その声は少しだけ震えている。
相戸夕が僕に近づいて、手を頬に近づけようとして、途中でそれをやめて腰の横に戻す。

その動作にどれほどの感情が込められ、それを押し殺したのかを僕は知らない。だから、より一層、この後の彼女の会話から彼女を知りたいと思った。

「アダムはイブから実を食べろと言われる前に、神様からその身を口にすることを禁じられている事を知っていたはずよね。それでもなお、彼女に禁断の実を差し出されたアダムは、つまり神様と妻に対してどちらかを選ばなければならなかったアダム……。そんなときに、アダムはどうなるか分からない、恐らく永劫続くであろう呪いに等しい罰を受けるかとを承知の上で、――神と彼女への愛を天秤にかけて、結局、妻への愛を取ったのだと思うの」

彼女はわらっていたと思う。

「だから、これは罪の話では無くて、男が女に対して、夫が妻に対しての最初の愛の話だと思うの。そういった面では彼は決して愚かではないし、仮に神がいたのならば神は彼らに罰を与えるのは過ちよね」

何かを思い出すように目を伏せながら相戸夕は言う。

「愛の証明の話なのよね」

そして、彼女の手が伸びて、僕の頬に触れた。

「あのね、私は貴方を取ろうと思うの、貴方の抱えた問題諸々全て含めて、貴方を愛していきたいの……」

「ねえ、お願い」

それが彼女の告白だった。

僕は、ほんの少しだけ泣いた、夕には気づかれないだけの涙を流した。

ああ、そうか、僕は彼女に恋していたのか。

夜の校舎、保健室。

二人の人間。

男女。

少年と少女。
子供と子供。
大人と大人。

僕は返事をする。
彼女はこの時初めて気持ちのいい笑顔を見せた。

その後、僕はウサギの悪魔を見る機会は終ぞ無かった。
しかし時に、ぬばたまの夜。誰かが僕に話しかけてくる気がした。
今日も天使は何も言わない。

ウサギの悪魔　ｆｉｎ

16　後日談

０００

夢のような一日があけて、何気なく教室に足を踏み入れる事はなかった。

教室はこれでもか、というほどにボロボロで悲惨な状態だった。

生徒たちは勿論無論立ち入り禁止、臨時の教室として家庭科室を使うことになった。

率直な感想としては、いたずらでも冗談でもすまないような器物の破損であった。

が、学業に支障をきたすことはあってはならない、という学校長の一声で修繕が早朝から始まり、教室は三日で完治していた。

前々から、この学校の金の使い方が半端ではないことは話に聞いていた。

例えば、学校の教室の設備だが、ガラガラと音を立てる扉は実は天井が支える仕組みになっている。だから常に浮いていて扉が壊れたりするとちょっとした車ぐらいは買える額が吹っ飛ぶ。

また、下駄箱は一般の高校で使われている様な至って普通なものだが、ある日、ある人が、いじめらている生徒の使う下駄箱を蹴りで粉砕した次の日、その部分だけ新品の素材が使われ十全に完治していたそうだ。

兎にも角にも金遣いが荒い。

その理由としては個々の生徒の親御さんには資産家が多く、多額の資金が寄付として送られてくる、ということがある。

これが、学校の環境を良くしており、生徒たちの学業や部活動など充実した生活を提供し、有能な教師陣を集める一員となっており、また進学率を上げるため親御さんたちも満足をするようだ。

しかし、あまりにも多額な寄付のおかげで、本来ならば必要もないと思われるものに他校では考えられないような資金が割り当てら

れそれでもなお、余っているという状態にあるそうだ。
蛇足だけれども、僕の家ようにあまり裕福でない家は寄付をほとんどしていない。

加藤菜月について、すこしばかり語っておこう。
ウサギの悪魔になった女性。
彼女とはそれほど親しい仲ではなかったから、多くを語れないけれども、それでもいくつかのことは分かった。
それは大きく二つ。
まず、はじめに加藤菜月という高校生は、春休みに死んでいた。家族全員が死んでいた。
原因は飛行機の墜落事故で、帰国するときの便でのことだった、エンジンの炎上が原因とされている。
彼女の家に足を運んだ。
前に教えてもらった自宅の電話番号を元にその地に赴き、彼女の家を調べた。
彼女の家はまだそこにあった。
そこには親戚が二人かいた、おそらく加藤菜月の祖母や祖父に当たる人だろう。
そして二つ目、と言ってもこれは祖父母から聞いたことから僕が推測したことだ。
結論から述べよう、彼女の存在が人々にとって希薄になっている可能性が極めて高い、ということだ。
加藤家の死に際して、彼女を知る者の来訪が僕だけであり、他の生徒達は初めから居なかったかのように音沙汰がないようだ。
僕が学校で教師から朝のホームルームで出欠の確認の際、彼女の名前を言わなかった時、内心ひやりと今後の展開について考えたが、しかし、他の生徒達はその時ひどく無反応であった。まるで登校初日に『退屈』と言う吐露を聞いたときのように、淡々と単調に、作業のような連絡が終わった。

僕が確認したところ――出席簿には加藤菜月の文字はあった……一ページ目にだけ。

勿論あれ以来、僕の周囲では皆当たり前の通常が取り巻いていた。

もともと親戚も少ないらしく、祖父母は母方の方だけで、父方の方の祖父は他界している、祖母も施設に入っているらしい。母方の祖母はその事実を知らされても理解する事は無い状態の様だ。

また、彼女達に限らず、飛行機墜落事故の死者の遺体は見つかっていないし、引き上げる予定もないという。

遺体は今も全て海にある。

加藤菜月のそれを除いて。

引き上げられることはない……言葉を失ってしまうほどに孤独な集団である。

珍事、異界というべきか、それは人間を選ぶ。

今回のように、クラスメイトがいなくなったとしても、常人が異質なものに気づくことさえ無い。異界に関わったものは異界に関わったモノにひかれやすい。その待遇も真であり、異界に関わり合いのないものは袖が触れ合うことは絶対にない。時に、社会に適合する者が不適合な世界に足を突っ込むものがいるが、それは僕のような人間も含めて、確実に存在不適合と言えるような因子を持っている。

――でも出会うまでは気づかない。

彼女も何かひかれるモノがあったのだろう。あくまで僕の解釈だから、結局は戯言なのかもしれない。

でも、いつだって、最後の引き金は人間が引くのだ。

彼女のことを考える。

個人。

故人。

加藤菜月。

ウサギの悪魔の少女。

彼女の選択は孤独であっただろう。
先に逝った両親。
誰も居ない家から学校に通い、生徒たちと触れ合い、何も無い所へ帰る。
ひとりで取る食事は何日続いたのだろうか？
一人分の食事を用意して、一人分の弁当を作り、自分の制服を洗濯しアイロンがけをして、選択して学校にいつものように登校する。
独りで家を出るのだ。
つい先刻までは一緒にいた家族とは永久に合うことはない。
僕に話しかけたときの慌てた感じ何かを伝えたかったのか、それとも何かを求めていたのだろうか。
ひとりになってまで何か成し遂げたいことがあったのか。
あるいは、悪魔が一方的に彼女に取り付いたのだろうか？
でも、この仮説は得心しかねることがある、昼の彼女、悪魔として立ちふさがる前、悪魔は加藤菜月である必要などなかったはずである。
そして何よりも、悪魔になった彼女が僕を教室で待っている必要が一切無い。
出会ったから、知覚したから、僕を排除するために交戦したのか？
否、ウサギは止めを刺さず跳んでいった。
ウサギが僕の左手を確認するように観察していた様子は見て取れた。
そして、儀式のように左手に口をつけた。だから、悪魔の目的は僕の左手であったはずだ。
天使が持ってきた『神の肉』と呼んだ左腕。
そして、加藤菜月の目的も同じく僕の通う学校にあったのだろう。
お互いの要求が通るからただ単に悪魔は体を、少女は時間を手にしたと考えると納得がいく。
「結果は出ないよな……」

なんの意味もない考えだけれども、真実からははるかに遠いことかも知れないけれども……それでも一つ、結果は残る。
僕みたいなすでに妙ちきりんな世界に足を突っ込んでしまった人間には忘れられない出来事であった。
僕に一つの記憶を刻みつけた。
他の生徒には忘れ去られたり、思い出されることが無くとも。
僕は……彼女のことを覚えていよう。
あの日、相戸夕がホームから転落しかけ、死にかけたあの日。
階段からホームに降りてこない一人の女子生徒を僕は確かに見た。
その生徒は半端な位置にいてスカートから下までしか確認できなかったが内の学校のスカートを確かに穿いていた。
異界が終わった後、電車が駅のホームに戻っても、彼女はホームに向かって来るどころか踵を返した。僕はたしかにその瞬間を観ていた。電車から降りた生徒など、いるわけはないし、プラットホーム向から誰かとすれ違った記憶もない。それでは、降りる階段を間違えたのだろうか？
いいや、それは絶対にない。改札に入れば一本道で、プラットホームも島式のプラットホームだから、行き帰りに関わらず、この路線を使うのならば特別な事情がなければ降りてくる。
特別な事情……。
例えば、顔を見られたくなかった……とか。
そして、加藤菜月の家を調べる際、ぼくの家から学校のある駅の延長線上に彼女の家があることも知った。
だから。
それでも。
僕はその生徒の顔を見た訳ではないからわからないけれども、それでも……受け入れることにした。
たとえ、僕に刻みつけられたこの記録が、刻みつける一因として嫉妬があったとしても……僕はそれでもいいかなと思った。

犠牲は人生に憑き物だから。

友だちになったんだから、ここにも学校の先生がいる（前書き）

？

友だちになったんだから、ここにも学校の先生がいる

０００

数日経って今日は日常であった。

教室が元に戻ると生徒たちの心情は戻る、表面上は色々な噂があっても直ぐに風化した。自分自身にあまり影響がないからだ。

それは僕も同じでウサギの悪魔になって消えた加藤菜月の席が無いのを見ると、思う所はあるけれども、普段の生活を取り戻していた。

僕はよく部活もないのに放課後まで学校にいた。

相戸夕との会話のためだ。

「ねえ、滋野君明日私の家に来てくれないかしら？」

「え？　土曜日か、まあ良いけれど。　何かあるの」

「今の一言について言いたい事が二つあるから、しっかり聞きなさい。先ずね『まあ良い』って何よ。せっかく恥を忍んで女の子が家に招待するのだから、妥協っぽく答えられると結構傷つくのが女心なのよ、それから、用事か無かったら家に招待してはいけないものなのかしら、そうだとしたら常識の無い私がわるいのだけれども、年頃の男の子ならばエロい妄想をモリモリ想像しながら喜んでいなさい！」

「はい、すいません行かせて頂きます」と即答する僕。

何故か最後は命令口調であった相戸夕だが。その時の僕は女心を知らない馬鹿と言う事で彼　女に許されたようだった。

なぜならば。

「じゃあ、明日楽しみに待っているわね」

と笑顔で返答されたのだから、きっとそうなんだろう。

次の日

言われた駅で夕を待ち、私服のダメ出しを受けながら彼女の家に

着いた。
最初に通されたのはリビングだった。
どうと言う事の無い家、平凡な一戸建て、犬などのペットは無くリビングには机に四つの椅　子があり、その他の中流家庭生活にあるであろう品々がそろっていた。どの場所も綺麗に掃除が行き届いていた。
僕にとっては初めての女の家であった。
彼女は指を指す。
「滋野君ちょっとそこで待ってなさいな。お茶を入れるから」
「おかまいなく」
「構うわよ！」
「おお、すまん」
「悪くないわよ」
最後の一言は何故かしっとりとした声色であった。そのまま夕は台所では無く、さっき僕たちが入ってきた扉から出て行った。
そしてすぐさま扉が開いた。
「え？」
声が勝手に出てきた。
入れ替わりにリビングに入ってきたのはスーツ姿の中年の男だった。
相戸の父親では……ない、よね？
僕はすぐさま席から立とうとしたが父親と思しき男は片手で制して、ちょうど僕の向かいの席に座った。
「こんにちは、滋野新剛です」
「ああ、聞いているよ、娘からね」
「……そうですか」
やっぱり相戸の父親じゃねえか！
何と言えば良いのか分からなかった。低音の良く通る男らしい声が印象的だった。
「一つ、話を聞いて欲しい」

父親は言った。真剣な面持ちで言う決心をした男の顔だった。
「はい」
「すまない、すこしばかり意地の悪い話になってしまうと思うが、気を悪くしないで欲しい」
ほんの少しの間をおいて男は言った。
「高校一年の夏合宿から帰って来た娘から、『話があるの』と言われたら何を想像するかな？」
急な話だった、彼女が一年の頃に部活に入っていたなんて初めて知った。もともと帰宅部だった訳ではないのか。
「私も男だ、娘の可愛さは知っている、親の色眼鏡を差し引いても美人だと思っている。親馬鹿かもしれないがね。……話を戻そう最初に聞いた時は妊娠か？　なんて事を想像してしまったんだ。高校生ならば彼氏がいても、仕方がない年齢だからね」
年頃……という奴かな……。と小さく続けた。
少し自嘲気味に言葉を精密に紡いでいる印象を僕は受けた。
「でも違った娘は『お父さんは同性愛者なの？』と言った。どうしてそんな事を言うのかと私は聞いた。『私は十七年間お父さんと一緒に暮らしているのよ』と娘は言った」
――。
「その時、娘が変わってしまったと言う事が分かった。そして同時に娘は変わっていないと言う事にも直ぐに気づいた。今までと……変わらない、同じ、素晴らしい女性だ」
丁寧に……一言、一言を区切って、彼の口調はどんどん強くなっている。
「十七年間、愛を惜しむことなく注ぎ大切に育てた娘だ。そして同時におびえた……」
夕の父親はテーブルの水差しをとってグラスに液体を注ぎ、そしてそれを一度で飲み干した。
「そういう人間の子供だからと言うだけで、娘が差別されるかもしれないからだ。それでも娘のその時の反応は私の思っていた者とは

違った。彼女は敬意を持って扱われるに値する女性だ。娘は幸せを享受するべき権利を持っていると信じている」
「……いや、違う、私自身が嫌われるだろうことを実際は恐れていたのだろう。ひどく自然なことだが、社会からすると普通では無いからね」
――。
「そして今、娘に関して一つ理解を深めた事がある。最初は恥ずかしがり屋なのかと思ったがそうでは無かった。滅多な事がない限り、彼女は他の男と一切話さなかった。だから自分がそうであるように……そうなのかと誤解をしていた。でも違った。それが嬉しい」
――。
「話が少しずれているように感じるかもしれないが、これは私に限った話ではない事を知ってほしい。人間であれば誰でも自身のうちに暗い部分は存在する」
父親はテーブルの上に肘をついて、手を組み口元に持って行って僕を見た。眼光は鋭く鷹の様だった。
「彼女は鋭い。いい目を持っている、妻はずっと知らなかったが、娘にはわかる。時間や、会話の数などを無視して、貫通して、彼女の目はその人間の本質を見抜く。だから、自分自身の暗い面も彼女は見えるし、相手の暗所についても、それでもいいと彼女は受け入れるだろう。でもそれは普通の人間にはつらいことなんだ……。自分が知る以上に誰かに知られることは辛いし、親しい人間を通して自覚することも……辛い」
……。
父親はここで一呼吸おいてからグラスに液体を追加した。
男は僕をもう一度見て言った。
「初めての事なんだよ、二度目かな。いや、どちらも正しい。一昨日娘が『話がある』と言った。紹介したい男の子がいると、それが君だ。真面目そうで礼儀を知っている良い青年だと思う、今後とも娘の相手をよろしく頼むよ」

「はい」
僕は答えた。
「もし私が君だったなら、なんの試練かと思うだろうね。家に呼ばれたと思ったらいきなりその相手の父親がいるなんて笑うに笑えない。夕は言わないだろうがきっと彼女はこう言うことが言いたいんじゃないかな？　私の事を君に話させる事と出会わせることについて……」
頃合いを見計らったように相戸夕がドビラを開けた。
「滋野君、上にあがって、私の部屋で話しましょう。お父さん、悪かったわね、忙しい時に」
「いや、良いんだよ。じゃあ私は仕事に戻るから外に行く時は戸締りをよろしくな」
彼女は嬉しそうに笑いながら言う。
「子供じゃないのよ」
相戸夕のその一言は今の父親を喜ばせるには十分なものだった。
去り際に一言だけ相戸の父親はいった。
「君は何か大切な事を万人に隠しているようだけれども。きっとそれを彼女は見抜く、いつか……たぶんね」

優の部屋は二回にあって一度リビングを出てから玄関の直ぐ隣りの階段を上がった奥の部屋にあった。
相戸夕の部屋は僕ほどでは無いにしても殺風景なものだった。
壁紙、机、本棚、ベッド、クローゼット等、全体的に白で統一されていて、窓のカーテンだけが淡いピンク。
「貴方は、その椅子にお座りなさい」
そう言って勉強机と思しき方を指さした。
「私はベッドに座るわ、……それとあまりジロジロ見回さないようにね」
「あ、ああ」
彼女はベッドにそっと腰かけて、じっとこちらを観察している。

目と目が合うと気まずい。
すると首をかしげる夕。
「うーん、おかしいわね」
「ん？　何だ体調で……」
「貴方の事を、……もしも傷つけたら御免なさいね」
などと奇妙な前置きをする夕。妙に怖いな。
「あなたは女の子は好きじゃないの？　私の今の服装に目はいってるかしら？　正直言って貴方の眼は真っすぐすぎる、先ほどから私の眼ばかりを見ているじゃない」
そう言われてから彼女の服装に目をやった、Tシャツの様な袖の無い上着。ゆったりとした洋服、服に関心の無い僕にはその正式な名称は分からないけれども、着たり脱いだりが楽そうだなと思った。それから短めの淡い色のスカート、黒いストッキング。
彼女の服装はそんなところだ。
正直いつも制服しか着ない男子生徒としてはあまり興味がないのだ。
いや、前者は単なる言訳だろう。お洒落に興味のある男子生徒だっている。正直僕個人として、服装に関して興味が無いのだ。
「結構この服は、自分で言うのも馬鹿みたいだけれど……セクシーな部類に入るのよ。貴方、滋野新君はさっきから気まずそうにしているけれども……それは女の子との気まずさでは無いわ。初対面の人間に対してどう対応したらいいのか分からない気まずさ……ねえ、私の言っている事……わかる？」
彼女は何故か悲しげに言うと短めのスカートをギュッと握った。
「それは……」
僕は彼女が何を言いたいのかが分からなかった。
「ごめんなさいね、私……」
「いや、別に相戸が謝る事じゃないだろ」
そうかしらね、と彼女は天窓を眺めて言う。
「……」

しばしの気まずい沈黙の後、相戸夕は紅茶を持ってくると言って部屋を後にした。
僕は彼女が出て行ったあと机に肘をついて頬に手を当て眼を瞑って彼女の言葉を反芻した。考えはきっと彼女の思惑を外れているだろうと思いながらも、僕は気付かないうちに彼女を落胆させてしまったその理由を考えていた。
「うーん」
答えの出ないまま漂う自身の考えが言葉に出る。
眼を開くと目の前には学校の教科書がある、まだ真新しい新書。
数学、物理、化学……と続く背表紙、そのまま眼を横にスライドさせると一番端にはカバーの付いた本が二冊あった。
机にはほこり一つなく綺麗に掃除されている。
何気なく僕は手を伸ばしたが、その後の行動は手を引っ込めた。
その後すぐに、相戸夕が紅茶を持って部屋に入ってきた。
「何も見てない、のね。全く約束を重んじるのか単なる馬鹿なのか、それとも」
扉の前でもたつく彼女を見て僕は腰を少しだけ浮かせる。
（こういう事なのかな）
と思う。
思い浮かんだ言葉は『パスカルの賭け』。正しい解釈かどうかは分からない。しかし、昔、と言うのも僕の年齢からしたら、おかしな話だが確かに昔の記憶。正確な彼の述べたままの言葉は忘れてしまったが友人の言った事だ。ニュアンスはあっているはずだが自信は無い。
彼の言った事には。
『どうせ生き（かけ）るのならば、確率がどれ程低くとも正しい方では無く、よくなる方に賭けようではないか』
生き方、と捉えるか、または緊張下での判断と言ってもいい。言葉どおりに確かに賭けだ。
彼女の望むことではなく、この場合正しい方、いや、違う、無難

で詰まらない方を僕は取ってしまった。
大切なのはここから先の話だと思った。
然しながら彼も、重要な決定の際、友人も結局は『正しい方』を取ってしまったのだ。その事に着いて責め立てる道理はどこにも無いし、それは『正しい』のだ。
勇気が無い訳でもなければ、考えが変化したのでもない。
人はそういうものなのだから。
考えずに跳び込むか、考えてから跳び込むかの違い。
だから、しょうがないじゃないか。それでも……ごめんよ、相戸夕。
考えを振りきってから、僕は立った。
「ああ、扉閉めるよ」
そう言って立つ僕に対して。
「いいの、気を使わないで、一応はお客さんなんだから。休みの日にわざわざ来てくれたのに手伝いなんて悪いじゃない」
と、僕を制した。
床に紅茶のあるお盆置き、出入り口の死角にあった卓袱台を組み立て、お盆をそこに置き直した。
「飲むのはここでお願いね」
といって、まずは一口彼女はコップを傾けた。
悪気のない罪悪感を感じつつも、僕は言われるがままに、机から離れ部屋の中央に座りなおした。
カップを口に運ぶ途中には彼女の顔が正面にある、匂いも味も分からないまま少しだけ熱いなと思いながら、彼女は、
「別に気にしなくていいのよ。なんだか、ほんのちょっぴりだけ、意地悪をしたい気分だったのだから、悪く思う必要なんてないのよ」
と、言った。
きっと、そうなのだろう、これは彼女の本心だろう。だから気に病む必要は無い、そう言ってくれる彼女に胸が痛くなる。
「やさしいのね……」

僕の思ったことを彼女が僕にいった。
「そうだ、ちょっと目を瞑って正座をしなさい」
何か名案でも思いついた様な口調で彼女は言う。そしてそのまま僕は彼女の言うとおりにする事にした。
「いいと言うまで、目をあけちゃだめよ」
すると。
一瞬ふわりと、頬に羽が当たったような感触があった。
そしてそのまま、重さを増しながら柔らかく包みこむ何かが僕の膝の上に乗ってきた。
正座をしているから、全然動けない。
そしてそのまま、抱きしめられた。
女性にしては少し大きな手で頭と背中を掴んで、足を僕の背中の方に回して、抱擁されていた。
相戸夕の甘い匂いがした。
やさしくてやわらかな匂い。柔和で温かい
「好きです。大好き」
「ねえ、私の事好き？」
「うん」
「もうこんな質問二度としないから、失望しない聞いて」
……お願い、と。
「私のどんなところが好き？」
「可愛らしいところ、率直であろうとするところ、潔くて爽やかなところ、すれてないところ、他人を、相手を思いやるところ、優しいところ、……嫌いなところなんて無い。僕は本当にどうしようも無いぐらい相戸夕という存在が愛おしくって大好きだ」
相戸夕は僕を抱きしめるのを止めて、僕の顔を覗き込んだ。
そして、万弁の笑みで――。
「嬉しい」
そういって、もう一度僕を抱きしめてから彼女は僕の膝から降りた。

その後。
「そうだ、人生ゲームをやりましょう」
とて、紅茶を飲んで、プレステの人生ゲームをやりながら色々他愛のない話をし合った。
二人での人生ゲームは無いという結論を出して、僕は彼女の家を後にした。
「じゃあ、また明日」
「ああ」

帰り道は色々な事を考えた、自分の事、家族の事、相戸夕の事。両親の事……。
春休みまで持っていた凝り固まった価値観が少しだけ溶けて行く気がした。
それほどまでに根詰める必要は無いのかもしれないと。
しかし、そして同時に、何に対して？　と言う事に関してはまだ答えが出せずにいる。
その次の日から。相戸夕が官能的な話を持ちかける事はめっきり減った。
僕と同様に、彼女も世の中に、いや周囲の世界への見る目が替わったのだろう。

友だちになったんだから、ここにも学校の先生がいる（後書き）

はい

毎日ゲームばっかりしているが、僕は神に愛されている（前書き）

俺を祝福してｒ

毎日ゲームばっかりしているが、僕は神に愛されている

０００

それでも日常は続いていて、制服をひとつダメにした後日の話。
相戸夕と付き合うことになって、期待に胸をふくらませながら楽しみに登校する僕の下駄箱に一通の手紙が入っていた。
おいおい、なんだよ、いくらなんでも持てすぎだろ僕。と常人であれば吐き気を催すような考えを一瞬だけ持ってから、すぐに消えて無くなった。
色気のない封筒に入っていて。一目で恋文ではないことが分かってしまう白い封筒。
その中に書かれた事が、すこしばかり問題だった。
楽しい気分も終わり。
いいことはそう長く続かないし、きっと多分悪いことだって永遠には続かない。

本日、夜。
貴高校、七階にて、お待ちしております。
天使より。

大雑把過ぎる内容と、説明の足りなさを感じずにはいられないが、最後の一文が問題だと思った。普通の人間に対してこんなことは書かない、しかしながら、僕自身は無視できない文字面であった。
天使に心当たりのある人間はそうそう居ない。全く関係ない場合もありうるがその可能性は無に等しいだろう。偶然はこの世に無いのだから。
その日僕はずっと授業が終わってから七階で待っていた。

それはそこに当然に、当たり前のように存在していた。
自然にそこに現れた。
僕は普段誰も使用しない屋上用の階段に腰掛けて待っていた。
この学校の七階は大きな廊下であった。
六階から七階に上がってくると左手にはコンクリートの無骨な壁があり、右手に広めの一本道、その道の終には非常口があり、左右には常に鍵のかかった教室、そして屋上に続く階段がある。
家庭科室や、備品などの倉庫しか無いこの七階は味気なく、屋上にも専用の鍵がなければいけないし。
だから、生徒は他の場所に比べると少ないほうだった。
けれども、特徴的なのはいつもピカピカで大きな一枚ガラスがある事だった。
冬は日光で暖かく、夏は死ぬほど暑い。
その窓から見る、高い風景から観る夕日は何時でも綺麗だった。
夕日が大きな窓に映っている、その夕日は今日を終わらせようと殆ど隠れていた。
そこから赤が大量に差し込んでいる。
座っていた階段から立ち上がり、大きな窓のそばに近づいて街の風景を見る。
少しだけ太陽に近づいた。
通りには誰もいない、大きな通りだから、いつもは車が通っているのだけれども……。
ふと、本当になんの気もなしになんとなく非常口の方に顔を向けると……。
男が一人立っていた。
光の加減で顔がよく見えないのだが体つきからして、確かに男なのである。
男に気づくと、大きな音がした気がする。
ガスバーナーが勢いよく燃える独特なゴーという音。
男はゆっくりとこちらに近づいてくる、光の具合でまだ顔の半分

も見えない。
「あなたですか？　僕を呼びだしたのは」
「ああ」
肯定。
前進。
よく通るこえだった。
男は僕に向かって、さらに前進してきた。
互いの距離は七メートル程で、ここに来て初めて、男の顔が認識できた。
その顔は整っていて嫌味がない……いや、違う。
印象が無い。
中肉中背、平凡な常人、何処にでも居そうだから、特定の場所には居ない、青年。
女のような顔立ちにも見える。
異常なまでに二人の影だけが伸び、夕方の廊下には夜陰が芽生え始めていた。
考え、声から察する。
年齢は僕よりも上だろうか、落ち着いている。
相手は僕を知っている、僕は相手を知らない。そこに奇妙で快美な畏怖を感じた。
校舎は暗かった。
「だ……」
何者かを尋ねる矢先。急に話が始まった。
「返してほしい、その左手を」
その声は僕の首元をそっと通過していった。
男の澄んだ瞳が光を放つ。
男は端的に用件のみを伝えてきた。
単刀直入、無駄に会話を重ね、腹の探り合いの機会事も無く要求をのめと言う事らしい。
彼は知っている。誰にも話していない事だ。

遅れて疑問が浮上する。こいつは何だ？　春休みの時みたいに天使を追ってきた奴か、ならば彼女を守らないと。
男の不意打ちで霧散していた考えがまとまってきた。
天使、緑色の天使彼女を守る……。
彼女と僕しか知らない秘密。
終わったはずの出来事。
終止符を打ち直す。
溜まっていた生唾を飲み込んで、疑問に突き動かされる形をとって僕は問うた。
「何者？」
始めと変わらない問答の切り出し、それしか言えない。
一瞬、目の前の男が一回り程大きくなった様に視界が揺らいだ。
体がおかしい、くらくらする意識がとびそうだ。体中が暑くなり、風呂上がりの様な軽い火照りを感じた。
夕日のせいではない。
今まで出会った誰より、もこの男は特別で特殊な何かを持っている。もちろん、この僕よりも、そう直感する。
「君のその力は僕の知人のモノなんだ」
よく通る声だ。そして、なのに、その声質を忘れてしまう。
夕日が最後の力を振り絞ってこの廊下をてらしている。
「知人？　僕もこの左手は知人がくれたものなんだけれども……その知人って何者なんですか」
ふむ、と男は一呼吸置く。
「元々は地界にあった神に匹敵するどころか遥かに凌駕する人間の霊魂、と言うのだろうか、象徴や影響力の一部がその左手にはある。それを元ある場所に戻して欲しいそうでね……」
なぜだろう、事実の摘示と言うのだろうか、彼の言う事を僕は無条件で信じてしまう。彼と話していると心地よく、今は浮遊感さえ感じてしまう。ぬるま湯に浸かっている様な、ぶよぶよとした弱い飛翔。又は寝る寸前の幸福なひと時といったところか。

「帰るべき場所に返すだけだから」
その声は音と言うよりはむしろ、文字のようだった。文章を黙読する時の心の声の様に当然として、沁み込む。
体が暑い。
少しの間だけ視界が暗転した。
「どうすれば……」
何を言っているのか自分でも分からない。勝手に口が動く、目の前の人間一人の雰囲気に圧されてしまう。見た目はどうという事のない普通の人間なのに、印象がないのに……。
件の男は手の甲を下にして右手を突き出した。
「左手を出して、……大丈夫切り落とすわけじゃあない」
優しい声だった。彼が言い終えると、夕日が沈み夜がやってきた。彼の顔が再び顔が判別できなくなくなった。
「わかった」
その男には不思議な引力があった。
ゆっくりと僕の左手が上がる。
不思議なことに自分の体が第三者の様で、今の僕はその光景を俯瞰している。どう仕様も無いぐらいに、どうでもいい他人ごと。客観を通り超えてさらに関心や興味の対象にもなりえないつまらない研究を映画にしてそれを無理矢理に見せられている感覚。
無理矢理に……？
左手を差し出しながら、他の建物からしたら些か巨大な窓から空を見た、その空に月は無く。　星は弱弱しく輝きを発していた。
左手を見る、夜の始まる紫色の空は美しい。
僕は眠いようだ。
ここで僕は夢見心地を味わうのを終えた。
誰かの『助けになってやれ』という声が聞こえた気がしたけれども、そんなことはもうどうでも良かった。
決してなげやりになった訳でも、やけくそになった訳でも無いけれども。それでも自分自身の事でさえどうでもいいと思ってしまえ

るぐらいに執着しない自分の心は本当に気分が楽で……しかし、
それも、どうでも良かった。
夜が来れば人は眠りに就くのだから。
だから、僕は眠いのだ。

毎日ゲームばっかりしているが、僕は神に愛されている（後書き）

オファーがキました

お金を稼ぐと時間がなくなる（前書き）

製造戦略しましょうか？

お金を稼ぐと時間がなくなる

「ダメっ！」
耳をつんざく声。
初めに感じたのは痛み、そして僕の体が本当に宙に浮き、男は大きく遠ざかった。
――否、僕が遠ざかったのだ。僕は、はっとした。
聞き覚えのある声、忘れられない音。緑色の天使。
我に返る。我に還る。
「この男は危険、関わる者全てを破滅させる力を持っている。悪の力」
緑色の天使は、初めて僕に話しかけてきた。
一面の闇は夜の世界を作り出していた。光が無ければ大きな窓は何も取りこまない。
その中で彼女だけが輝いていた。体のほてりや浮遊感はもうない。眼下に広がるは己の突き出された両腕と天使、そして闇にその身を喰われた不気味な男が一人。
「アイツ何だ！」
今までに会って来たどの人間よりも生き物よりも、生命特有の音を持たない人物。
「悪人の名前を全部知ってるわけじゃないから……。でも剛の“左手”の事を知っているなんて――普通じゃない」
ふっ、急に笑いがこみ上げてきた。
「じゃあ！！　倒さなくっちゃな！！」
僕は声を張り上げた。
さっきまでの威圧感さえ今は無い。大声になったのは恐怖をかき消したかったのが理由なのかもしれない。
星空の中、学校の校舎の廊下で、僕と件の男との出会いが始まっていた。

お金を稼ぐと時間がなくなる（後書き）

1

００８

目の前の男に滋野新剛は問うた。
「……お前、何だ？　なぜこの腕の事を……誰から聞いた？」
男は小さく首をほぐすように頭を左右に振り近づいてきた。
何も言わない。
「いや、そんな事は後で聞く事にしよう。吐いてもらうぞ知っている、アンタの全てを」
剛の左腕は特別である。一切の攻撃を受け付けず、手を天に翳せば大地が叫ぶ。
しかし、このところ調子が悪い。が、依然、左手自体は無双の力を秘めている。
「集中」
緑の天使は、慎重な口調で言葉を紡ぐ。既にその手には身の丈に合わぬほど長い太刀が握りしめられている。
その太刀は虹の様に曲がっていて、波打つ波紋が美しく、冷たい光を反射していた。
「君は下がっていてくれ、僕が様子を見る」
剛は言った。
印象のない男は動じずに「はあ」とため息交じりに言う。
剛と天使は数メートル先の男を睨みつける。
とてもこれからひと騒動起こそうとする者には見えない。
「どう思う？　君は、いや、君たちは」
男は問うた。
「人が生きると言う事は神の奴隷になると言う事ではない。どれ程正しく立派に慈悲深く生きていてもそれに従っている限り、奴隷からは抜けだせない、それは家畜となんら変わらない。いかに悪く、

下劣で、劣悪な殺人鬼であっても自由であり続けようと逆らう事が人間らしく、そうでなければ人が生きている意味がない」
その言葉は岩に刻みつけられる様に剛の脳裏に沁み込んでいく。
「天国において家畜となり下がるより、地獄の支配者たる方がいかに良いか」
「違う！」
天使は叫ばずにはいられない。
天使に在るのは内心の焦り、彼女は知っていた。この発言を最初にした天使の言葉を。
男の言っている事の真意は天使自身の正義の不確かさ、そして自分自身のたった一つの望みを浮き彫りにするものである。
『違う』……剛の頭にはその言葉が疾走する。
男は続ける。
「君にその部分は在るかい？　なにも恐れない……悪だと言われても恐れない、孤独になっても恐れない――――――神も恐れない」
彼の声は聞かずにはいられない、もっと聞きたいと言う衝動を重々しく突き立てる。
「こんなに強い奴を見た事はあるか？　徹底的に戦い続けるぞ」
男の声は岩に刻みつけるが如く校内を木霊する。
「……」
滋野新剛は物を言おうにも口をパクパクとさせる事しかできない、言葉にならない。滋野新剛は知っている、人が人らしくある、と言う事について。
だから、何も言えない、何も言わない。反論が共感に変わってしまわないように、今の言葉を必死に忘れようとする。
「……納得が欲しいならば仕方が無い、相手はしよう。君はその後僕の事を嫌うかもしれない、憎むかもしれない。それは無論、君の体が傷つくからではない。それでも僕は甘んじて受け入れよう」
男が言い終えると、天使は凛とした声で言う。
「この位で良いでしょう、貴方にはもっと別の事を話してもらわな

いと」
「君の思想を非難するつもりはないが、そういう事を聞きたかったんじゃないかな？　……いや、きっと君たちの追い返した、君の同胞達、天使兵たちも同じことが言いたかったんだと思うよ」
ふう、と件の男は息を吐いて、雰囲気に合わない口調で言った。
「少しは信用してやりなさい」
天使は眉間にしわをよせる。
「滋野新剛君だったね、穏便に済ませるつもりだったけれども、それはどうやら無理なようだ。彼女の気持ちをしっかりと受け入れる今の社会に……いや、君は賢いから分かるね」
不意に投げかけられた言葉に剛の体は緊張で筋肉が膨らむ。
「剛くん、大丈夫だよ、彼女が話をする事もこの後……時間が解決するだろう」
男はまるで、未来を含めて全てを掌握しつくしたように言う。
滋野新剛は、心情を切り替え、誰にも聞こえない独り言を言う。
「逆らい貫く者には憧れるさ、僕だって誰だって」
件の男は律儀にも挨拶をする。
「人同士、同じ言語であっても。理解しあうのは難しい」
剛は内心同感だ、と感じた。
印象の無い男は相変わらず手ぶらでとてもじゃないが、この場所に似つかわしくなく浮いていた。
天使の殺気がびりびりと辺りにまき散らされ、じりじりと間合いを詰めていた。
聞く耳此処に在らず。
――刹那。
男が消えた。
文字通り消えた。
そして金属が摩擦するシュンッという音。
音のする後方に目をやると、壁が亀裂を作り陥没していた。
滋野新剛の後方にいたはずの天使は壁に貼り付けにされていた。

その姿は磔刑を思わせる。
　彼女の持っていた太刀は二つに折られ、両足の太ももの部分に刺さっており、両手はコンクリの中に埋め込まれている。さらに、腹部の洋服は破け、純白の肌の代わりに黒々とした穴があった。大きな穴が天使の腹にあいている。
　天使の臓器が無機質なコンクリートの壁に薔薇の様な後を残す。
　鮮血が流出、派手に水たまりを作る、春休みにも見た赤い彼女の血。
「……」
　傍らには件の男が立っている、奇妙な事に返り血を露ほど浴びていない。
　男の表情は暗い。
　言葉にならない。滋野新剛の頭には絶望と言う言葉しかない、死ぬのか？
　それは決して『自分が』と言う事では無く、目の前にいる天使に向けられた心だった。
　彼女は――それは――――駄目なんじゃないか、だって。か、のじょ――は。
　天使は本当に動かない、声も上げない、痛いだろうに、粉砕された骨と重力に逆らって張り付いた臓器はもうどうしようもない事を告げていた。
「ぅぅぅぅぅぅぅうううぅううう」
　低く滋野新は唸る。
　その光景は誰から見ても不気味だった。
　自覚できない狂気が滋野新剛と言う自分の中で急速に育ち、自身の思考を現在進行形で食い破っている。
　この男を殺せ。
　全身の血が沸騰し、血管が浮き出る。

顔は人間のそれでは無い修羅か羅刹を相手に垣間見せる形相であって

強靭な狂人は心に宿ると言った人もいるが今の剛はソレであった。

自分の中ではどうしようもない位大きくなってしまった感情の捌け口が今、目の前にいる。

辺り一面の景色が真っ赤に染まっていく中で、滋野新剛は一度だけ女性を思った。それは相戸夕なのか天使なのか、それとも母親なのかは誰にもわからないことだった。なぜならば今の彼は最早どうしようもないほどに滋野新剛では無かったのだから。

男の影が消え、そしてその容姿が消える錯覚を滋野新剛は捉えた。

錯覚は所詮錯覚、しかしながらその錯覚を与える過程には何があるのかを知るものは少なく、　それは気付かれないように夢と現を現実と言う世界で交換する一つの手段の様に働き、知らない世界へと対象を導く。

何も無いのだろうか？

剛は弾け飛んだ、後先を考えずに真っすぐ、本能が最短だと思う方向に突き進む。

見える。

「そんなものか？」

男は速かった。

突如回し蹴りが剛の右腕を巻き込んで肝臓に入り、体の反対まで電撃が突き抜けた。

瞬間、剛は自分の腹に食い込む足男の足に向けて左の手刀を振り下ろす。

殺せればいい、結果だけを求める。

代償になりうるすべてを渡す。

体が悲鳴を上げる事もない。もう死んでいるのだから。

しかし、攻撃は男に当たらなかった、なぜならば剛の体が宙に浮き、足の踏ん張りも利かないまま後方に飛んでいるからだ。

宙に浮く剛は壁まで到達することを見越して、壁で受け身をとり、

先ほどの攻撃から、タイミングを予想し、体が吹き飛ばないように壁際で男を待ち受ける事を決めていた。
壁にはつぶれた右手をクッション替わりに使用した。
この時、磔にされた天使の腕を剛がもう一度潰した。
二つ分の腕の血液無機質な床を再び新しい模様で彩った。
剛はその事に気づかない。
件の男はまたその姿を消した。
既に剛は声を張り上げながら、腕を前に突き出す。
見えない相手にも、実態が無くともそこに存在するのであれば剛は音としてそれを捉えるすべを持っていた。
剛の突き出された目の前に、男は立ち止っていた。
しかし拳は当たっていない、精一杯伸ばした拳の手前でさっきからいた様に男は立ち止っていた。
「凄いな、そんな事が出来るのか、視界に頼らない攻撃か」
ごり、と言う音。
剛の右目が床に落ちた。
剛は右目からダラダラと涙を流した。
件の男は何もしていない、少なくとも剛は何かをされた実感は無い。
格上でそれでもどの様に格上なのかも分からない力の差を今の剛は感じるすべはなかった。
だから、剛は目の前にいる的に拳を振り全て空を切ってもまた次と、空振りを繰り返していた。
彼女は泣いていたのだと思う。
少なくとも滋野新剛にはそう捉える事が出来た。
「本当にごめんなさいね」
天使のかすれる声が、囁きが耳をくすぐり。剛の狂気が萎んでいった。
「そうか、そういう戦いではないのか」
何か悟った瞬間。

『ずれ』の認識。
理解を意識した時。
人の可能性の余地。
それらがそこにはあった。
滋野新の狂気は引いて行った。
あるいは出血により頭の血が下りたのかもしれない。
剛に痛みは無かった。本人もそれについては何となく気づいていた。
ああ。俺はここで死ぬんだな、と悟った。

せっかくだから眠るを使うぜ（前書き）

みいいみいい

せっかくだから眠るを使うぜ

距離にして再び数メートル先、件の男。
男の眼がこちらを見ている。その瞳は全ての光を反射しない。闇にその身を喰われた男。
「素手でやるのか？　斧を出せ、使ってみれば分かる」
男は闇の中で手を組んで壁に背を預けている。
「大丈夫そのぐらいのハンデはくれてやる」
剛は本来見るべき相手を見れずに隣にいる少女を見ている。
彼女の細い指が砕けて壁に溶け込んでいる、左足首から下にあったモノが赤い水たまりの中に落ちている。頭は前に力無く垂れ下がり、血を吸っていつもより重たげな髪の毛が顔を隠すものだから、彼女の表情は窺えない。
格上の相手、手の内も分からぬまま相方を失った。右手も右目も失ったこれから全てを失うだろう……やるしかない。
滋野新剛の最後の望みは一つだけ、彼女が死ぬ前に、死にませんように、彼女が一人で逝きませんように。
剛の呟きは固い決心の表れだった。
「もう少しだけ……」
その斧は墓標のように現れた。悠然と斧が静かに主人を待っている。
左手でしか扱えぬ斧。
その斧は怒りも悲しみの心も剛の全てを吸収していった。
剛はゆっくりと手を差し出す。
「貸してくれ、力を……勇気を！」
目を見開き、右人差し指を相手に向け、柄を掴んだ。
「一分だ、それでカタをつける！！」
男の目は刺すように鋭い。
「僕は運命だと信じている貴方は僕の乗り越えるべき“出会い”だ

と確信している。僕今運命を乗り越えるために戦う、勝つんだ。そうだった……彼女との出会いは運命なのだから」
「いい顔になった、『覚悟』を決めた男の顔だ」
そして続けて言った一言。その一言は独り言だったのでこの声が剛の耳には届かない。
「ならば、きっと彼は力を貸してくれるだろう」
男は呟いた。

剛が初めてその斧を使った時の事。辺りの景色は全て自身を含め、遅くなる。
そして新しい視点を持った。圧倒的な第三者の視点と言うのだろうか、剛は自身の視点と、周囲を俯瞰する様な視点を同時に共有していた。
故に多数が相手であった時、本来は死角からの攻撃であっても、よく見えた。
そして不意打ちが、かする事さえも無かった。
また、相手のフェイントや目新しい行動が丸分かりとなり、虚を突かれる事も減少し、同時に反撃もしやすかった。

しかし今回は違った。滋野新剛の俯瞰風景に男が映らない。数メートル先にいるはずの男の姿が無い。あるのは自分と血まみれの天使だけであった。
が、目の前には男がいる。さっそく剛は見えるが故に、虚を突かれる。
「一体、何なんだ」と、剛。
男が天使から離れゆっくりと歩き出す。
「『彼女』のものに間違いない」と、件の男。
普段なら聞こえない様な些細な他人の声が耳に入る。
件の男は右、左、右、左と交互にその足を前に出しそれに合わせて手を振る。ゆっくりと歩き出す、何も持たず、ただちょっとそこ

ら辺の店に出歩く様に、それでいて姿勢よく……歩いている。
一見、隙が無いわけではない。しかし本当にこの男は戦っているのか？　と剛は疑問を持つ。　無論さっきまでいた緑の天使は血祭りにあげられているが、そう言った殺伐としたピアノ線の様な緊張感が無い。端的に言うと男の仕草が間の抜けた様に映る。
姿を現したまま剛に近づく男。
斧の間合いに入る少し前に剛は斧を振り下ろす。
男の歩みは変わらず肩口から一直線に男が切断される。……嘘を見た。あまりにも変化も抑揚も無い動きに脳がそう錯覚させた。
然し事実、そこには何もない。男は消えたのだ。
切ったから消えたのだろうか、消えるべくして消えてしまった男の足取りを掴む術を準備する。
剛の眼には何も映らない、ただの学校の廊下と磔の女、そして自分自身しかそこにはいなかった。
「ん？　いや、違う」
と、滋野新剛。
斧を己が左に突き立てる。そして、両手を顔の前で合わせる。
「門！」
光る。
一瞬の閃光の中に大きな男が獅子の子供を抱えている映像を剛は見た。
唱えると剛を中心に、周囲余すところなく襖の結界が囲い、『外』と『内』に分かれる。
その結界には剛の知らない嘗て人々が生み出した直線を主とした文字が浮かび上がり、一定の間隔を保ったまま周囲を回転している。
すると、今まで消えていた男の姿があらわになった。
「そんな事も出来るのか。器用なものだな」
「逃げ場など！　無いぃ」
すぐさま剛は左手にある、斧を男に向けて投げつける。
音速を遥かに超える速度で放たれたはずの斧をいとも容易く、男

は前のめりになって避けている。
「危ないなあ、当たったら死んじゃうじゃないか、どうしてそこまでして殺そうとするのかが……まあ分からなくもないか、分からなくもないか。つまり彼女は君にとって何なのかな？」
男は天使のいた方を指さし、言った。
その人を喰った様なもの言いは気持ち怖いな、と剛は感じた。
剛は自分でも怖いくらいに冷静だった。
「針」
先刻彼方に消えた斧が針状になって剛の左手に収まる。
然しながら、本来の質量の半分は細く研磨された形状のまま剛の背中、放射状に円をなして滞在している。
「まだ頭に血が上っているのかな、後で答えを見てみよう」
男の張り付いた能面の様な笑顔は、攻め続ける剛の戦意を徐々に腐らせるかの如く脳裏にこびりつく。
小癪な！　と剛は業腹を立てるや否や、剛の背に在る針の円はその身の左右半分を残して、飛散し男目がけて失政に飛び立った。
また左右に残る半分は剛の背中を守る鎧の役目を果たすために一定の間隔で揺らいでいて、これから羽ばたこうとする蝶のようだった。
飛散した針は人間の最も避けにくいとされている腹部に向かうものと、足に向かうものの二手に分かれて、対象の男を取り囲む。
「お前をオトス」
上下左右前後に散布された殺意を具現化した様な殺すための針。
それが今役目を全うするために無音のまま弾け飛んだ。
しかし、この男は何なのだろうか？　さっきから攻撃をするでもなくただ単に此方の攻撃を回避するだけで、攻撃と言った行動を一切取っていない。
嗤うそれだけだ。
その笑みは、周囲を包囲されている今も、結界内に閉じ込められた今も、出会う前と変わらない雰囲気でそこに立っていた。

剛が心で行け！　と念じるとそれらは一斉に狙い澄ました所に空を走った。
「それらは届く事は無いだろう」
男は嗤うことなく言った、いや、そもそも嗤ってなどいなかったのだろう。剛はそう思い直した。
一斉に空を切る針陣は腹部と脚部に近づくその手前、滋野新剛がその過程を確認できたのは一瞬でしかなかった。
彼の男のシルエットが再び消失、消えたのだった針の斧は突きささるべき空間を旋回し、剛の背に在る半円に戻り円の形をなして、剛の背中を守ることにした。
「また消えた！　いや、違う、いるのならばこの中であれば……」
そう、剛の言うとおり、この中では一切の装備が無効になる、姿を消す様なものであればそれを貫通して肉眼でとらえる事が出来るし、いかなる強靭な鎧であっても、女の柔肌よりもはるかに強度は劣る様になってしまう。
事実上の防御を無視する結界。それこそが彼の唱えた『門』であった。
だから、信じられない事ではあったが、件の男はそう言った後付けのものの力を借りて彼がいなくなったのではない。ゆえに、剛と言う人間の動体視力と洞察力を遥かに超えての移動であると、結論づけた。
「そんな攻撃で大丈夫か？」
背後から声がした。
「見えないのならば、見なければいい……狙えないのならば狙わなくてもいい」
その言葉が言い終わる前に剛の背中に纏っていた針の円は霧散した。
もう、時間が無いと滋野新剛は感じた。
（父さん、母さん。ごめん）
微粒子。あまりにも細かく波の様に互いに干渉しあいながら周囲

を霧が包む。所々では稲光の様な閃光が生まれては消えを繰り返した。
その空間の全てを攻撃した。
滋野新剛を含めた全てに攻撃した。
そして。
剛の視界が回転、暗転した。
剛は思う、また攻撃されたのか？　いや、違う血を無くし過ぎたんだろう。
「無理はしない事だ。死にはしない」
と男は告げる。
「死んでも良いと思ったのか？　それは違う。そうでなければ君の体験した春休みの死地は抜けられない」
剛の頭の中に、あの日の記憶が蘇り、疾走する。
（ああ、暗いな）
滋野新剛は呪文のようにぼそぼそと独り言を言った、あまりにも小さい独り言だから、それを聞くものはいない。
「切ったと言う事実は、残る。避けたと思っているかもしれない、確かにそうかもしれないが、事実は残る」
剛はにやりと嗤った。
そして……。
何かが切れる音がした。
駄目だった、ごめんよ。
心の中で呟いた。
力になれなくでごめん。
「最後の霧は囮か――」
（寒いな、何も感じない。血の匂いも無い）
「切ったと言う事実があれば、当たらなくとも切れるものなのか――驚嘆」
件の男の感想を聞きつつ。剛の意識が無くなる直前に男が着ていたと思われる衣服が目に落ちたのを感じた。

真っ二つになった布が地面に着く音を最後に剛の一切は無くなった。

せっかくだから眠るを使うぜ（後書き）

^^;

おすぎとピーコは中が悪いと聞いたんですがどうなんでしょうか？（前書き）

b

おすぎとピーコは中が悪いと聞いたんですがどうなんでしょうか？

０００

眼を開けたまま寝て、そのまま起きた事はあるだろうか。

だんだんと視界が回復して、明るいと言う事を元々知っていたかのようにその明度を理解しつつ、眼の奥が痛い。

そんな感じ。

悪夢を見ていたようだった。

ぼんやりと視覚を知覚させ、周囲を確認した。

学校だった。

七階でもあった。

夜。

目の前には件の男と天使がこちらを向いて僕の目覚めをまっていた様子だった。

見計らったかのように、抑揚も特色も無い声が校内に響く。

「おはよう」

そんな事はどうでもよかった。

「天使！」

目の前には天使がいた。

それは決して比喩などでは無い実際の天使、緑色の天使。

彼女は昔、弱弱しく僕の前に現れた天使。

彼女は一の傷も負ってはいなかった。

気が付くと僕はもう既に彼女に抱きついていた。

「……大丈夫よ」

天使は言った。

暫くの間、僕の体はそのまま硬直した。もうそろそろ彼女から離れるべきだけれども、体が言う事を聞かない。死んだように硬直してどうしようもなく嬉しかった。

そして――。

「ちょっと、いいかな。時間が無いんだ」
良く通り、印象の無い文字の様な声がした。
「別にそのままでいいから、聞いてくれ」
僕は力が抜け、ずるずると天使の体にそって床までずりおちた。
「何が起こったか良く分からないだろうから、色々と説明するけれども、あまり細かい事を説明しても意味がないし、幸せな生活が送れる訳でもないから省略するよ」
僕と天使は座った。
男も座った。
「まずはこの斧からかな、ちょっと剛君これ持ち上げてみなよ」
男の隣に墓石の様に突き立っていて、墓碑銘の様な彫刻が立体的に浮き上がっていた。
それは、とても神々しかった。とてもとても、気品に満ちていて、美しくさえあった。
男は斧をペチペチと叩いて早く持ち上げろと催促している。
僕は男の隣に刺さっている斧に手をかけた。
僕は立ちあがって左手で掴み持ち上げる……ピクリとも動かなかった。
そして脇から男がその斧をひょいと軽々しく持ち上げた。
「その左手はね、君に馴染んできたんだよ。だからこの斧を持ち上げるだけの力を失ったんだよ」
僕はその事について何か思う事は無かった。
彼女が、天使が生きている事が良かった。
そして、男は妙に子供っぽい口調であるように感じた。
おや？　そう言えば建物の亀裂や、飛び散った血液は無く、僕の腕や目玉も――体は五体満足だった事に今になって気づいた。
「どうでも、――あの……何がどうなっているんですか？」
最初に聞くべきことだった。予想は出来ていたが、事実の確認が大切だと思った。
男はあまり考える事も無く話し始めた。

「最初に言っただろ、目的は君から左手を手に入れる事。神の肉と言われる人間界にいた人間の肉体の象徴の片割れをもとの場所に返すんだ。これが無いと生まれ変わりみたいな感じの、その人間は中々大変だから」
詳しい事はナイショだと言った。
「ほら、最近は猫も杓子も個人情報保護でシュレッダーにする時代だからね」
口調は軽かった。
そして僕の真意を汲み取ったのか、話を続けた。
「だから、君たちの命を奪う必要は無かった。手を出してもらって、斧を出して今の様に引き上げられない事を確認して、君では使えないから下さい、と言うのが当初の目的出会ったのだけれど。そっちの天使の邪魔があってね、因みにそっちの天使の噂も聞いたからね。かなりの大事を起こした張本人が、どんなものかと実践を見てみたかった。だから、あんな展開になったんだよ」
それに……と、言いながら天使に目を向け、耳を明らかに持っているようには見受けられなかったからね。と付け加えた。
「とにかく、必要無いでしょ、重いし……いいよね」
良いと言われてはいそうですかと、渡していいのか僕は分からなかった。僕は天使の顔を仰ぐことで選択をゆだねた。
「ええ、どうぞ。どちらにしても貴方を私どもでは、貴方の要求を止める事は到底出来そうにございませんから」
「そう。もの分かりがよくて助かるよ」
ありがとう、と男。
僕には分からなかった。たくさんの事を聞きたいのに何をどの様に聞きたいのかどんな言葉で思いを伝えるのかが分からなかった。
「弱くなるってどういう事ですか、馴染むという点は分かるけれども弱くなると言うのは理解でき、ません。体の治癒能力も、当初よりはるかに早まっている気がします」
「普通の人間よりも強靭な肉体になる程度だよ、カスみたいな副産

物さ、本来の力はそんなものじゃない。それは“神の肉”と言われている代物（しろもの）だよ、実際は昔の王様の肉体なんだけれども、神様以上の存在。それが体の治りが早い程度で済むはずがない。たとえ体の一部でも――」

そこで男は話を区切った。今の段階で言える事として、この男は不必要だと本人が感じた時点で物事の説明をしない様な話し方をする。まるで、僕が既に知っているから必要無いように、まるで、利益というと少し違うが良い結果をもたらす可能性の無いものについて言及する事がしようとはしない。

そして何より、さっきまで話していた事を僕の脳が拒絶するように覚えられない。忘れていってしまう……ものすごく僕たちにとって根幹を支える事を知っていると思われる情報かもしれないのに。

「……」

僕は口を開ける事が出来なかった。話を聞く事に必死になりすぎて、何度も男の言葉を反芻しても忘れていってしまう感覚を纏いながら、それでも必死に記憶しようとした。

「まあ、正しく扱えるのは彼の転生先の人間ぐらいだからね、君では不完全なんだけど、まあ、彼の力の一部は扱えるようだね」

男は斧を手に取り、持ち上げ、軽々しく振り回し小さな声で言った。

「じゃあね、この斧はもらっていくよ」

「まてよ、それは僕にとって必要な物だ！」

待ってくれ、何かが違う気がするし、男の言う事が正しい気もするが、急激な変化を僕の中にある何かが拒んだ。

「大丈夫、これが無くても今までのように生活できるさ、それにね、もう君じゃこれを持つ事は出来ないよ。ほら」

否定。

男は丁寧に僕の前に斧を置いた。

僕は躊躇なく左手を伸ばした。

やはり斧は大地の様で、一切動かなかった。持ち上げることも押

す事も引く事も出来なかった。
「言ったでしょ、君に手は馴染んでしまったんだ、もう元には戻らない。君がこれを使えたのは左手だけで其れは、元々の持ち主が使えたってだけで最初から君には荷が重すぎたんだよ」
でも、けれども、一度は手放しても……彼女がくれたものじゃ無いか。
関心なさそうに男は斧を放置して、もう一度僕はそれを掴もうとする。
けれども、それを触る事は僕には出来なかった。
「その斧を手放してはくれないか？」
男は優しく言った。
既に斧を振る資格のない僕に。
「僕は“特別”では無かった」
無表情な声を吐きだした、他の誰でもない滋野新剛という己のために。
そして……剛は斧から手を引いた――手放した。
目の前の男は、今まで僕しか使えなかった、あまつさえ触る事を許さなかった斧を軽々しく持ち上げ、そのまま天使に目を向けてた。
「君は口を利けなくされていたんだよね。……大丈夫、今なら話せる。言いたい事があれば聞こう」
彼には全く嫌味は無かった。
印象や感想、何も無かった。
「結局、私は何も達成できなかったわ。貴方に託しても良いの？」
無欲な天使の願いは一つ。
彼はそれに対してコメントをした。
「駄目、だね」
「なぜ？」
言い終わる前に、緑の天使は叫んだ。
「君はさ、何をしたかったの？」
「それは……」

「なんにせよ、一人ずつやって行くことだね、横着はいけない。いっぺんにやろうとしても上手くいかない、成ったとしても直ぐに砕け散る」
男は僕を指さした。
「彼を頼んだよ、君自身の勉強にもなるだろうから……」
「分かっている、つもりだったわ」
「分かっているじゃないか、それなら良い。……僕の言っている事分かるかい？　君に合わせて話したつもりなのだけれども……」
手に持った斧をプランプランと振り子運動をさせ、時間をもてあましているといった仕草がわざとらしい。
「うーん……まあ、いいか」
笑っていた……と思う。
暗かったから分からない。
そう言う雰囲気だった。
「結局のところ……」
ここで、男は彼女に近づき耳打ちをした。そうすると、天使は僕を見て、目に涙をたくさん溜めて――。
「そうね」
と、言った。
そして、男は思い出したように滋野新剛の顔を見ていう。
「そうそう、それと滋野新君だったね。困った事があれば僕を尋ねに来るといいよ、力になれるかもしれないから。少し変わった世界だけれど『情けは人のためならず』だからね、まわりまわって返ってくるかもしれない……」
僕の不思議そうな顔を見て男は続けた。
「結局ね、言いたかった事は昔の事を考えるよりも、未来の事を考えるよりも、今やる事をしっかりやれば良いと言う事だよ。ありきたりだけど大切な事だ、殆どの人間が達成できない事だし、当然過ぎて気づかない、気づいても注意をしない、注意をしても実行に移すと思っていた以上に困難だから挫折する。ゆえに見落とす。自分

を守るために見落とす……人生を、その人間にある可能性も見落としてしまう、勿体ない事だ。君がそこで目を覚ましてから僕が何者かを聞かなかったのは正しい判断だ、そんな事を聞くよりも自分の事をしっかりやらないとね」
それを言い終わると、剛に背を向けて一言。
「君は悪魔じゃあない、天使に唆されたんだ」
と、言う。

――そしてついに、彼は校舎を後にするために歩き始めた。
彼はもう一度だけ振りかえって言った。
「そう言えば、滋野新君には、最近彼女が出来たんだってね」
男は何故か僕にではなく天使に向かって言葉を投げかけた。
「そう」
天使はそれまでの全てを忘れてしまった様な表情で、忍び笑いしながら言った。
そして、泣いていた。
声をあげる事無く堪えながら、号泣していた。
肩を震わせ、手を口にあて、ぼたぼたと床に涙を流した。
「ううう、うっ」
彼女は、ないていた。
「か、あ……」
僕は何かを言おうとしたが、最後までは言わなかった。

いつに間にか、件の男は消えていた。
理解していない事は多い。
結果は残る。

その日の事を、忘れないように努めたが。僕の脳裏にはもう殆ど彼に関する事が無かった。あるのは結果だけだった。

結果しか残らない。

僕の目覚める前。
彼女はそこにいて、相手もそこにあった。
何を話していて、何を理解して、何を感じて、何があったのか。
どの様にこころが動いたのか。

その頃の彼女を僕は知らない。
ずっと知らない。
ただ、ずっと、待っていただけだったのだろう。
昔。
ある人が言った。
きのみを持って僕に言ってくれた。
「この塊は実に自然で堂々としている。塊。これは生そのものでしょう。私は何かでこのものの説明を見つけたい。私はきのみを掴むことは許された。しかし全部は与えられなかった」

おすぎとピーコは中が悪いと聞いたんですがどうなんでしょうか？（後書き）

これは独り言ではないんです

００９

――屋根。

今日は雨にもかかわらず、虚ろな目に空を映している。名前も知らない天使。

雨が容赦なく降り注いでいる。決して泣いているのでは無いだろうが、泣いたようにしか僕には見えない。

天使。

窓から僕が声をかけても反応をしなくなった。天使。

ずっと一人。

何も無い。

それでも……

母親。

「母さん……」

――そして天使は。緑の天使は、今も、何も言わない。

ＥＮＤ

^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^

^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^

^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^^

^^^^^^^^^^^^^^^^^^

z

1

かわいい可愛い、子供だった。こんなにも、愛おしいものがこの世にあるのかと思った。
可愛い、かわいい息子だった。
もっと話をしてやりたかった。
もっと話を聞いていたかった。
もっと抱きしめていたかった。
もっと一緒にいたかった。
もっと色々な料理をふるまってあげたかった。
もっと愛していたかった。
もっと観ていたかった。
もっと、もっともっと、もっともっと、もっと、もっともっともっと。
何もかをも覚えている。
初めてはいはいをした事。
初めて立った事。
よちよち歩きがぎこちなくて、よく転びそうになった事。
始めて折ったくちゃくちゃの折り鶴を私にくれた事。
苦手なピーマンを自分から初めて食べた事。
ちっともうまくならないハーモニカを自慢げに吹いて見せてくれたあの日の事。
駄々をこねて言って私の事を大嫌いだ、といったあの日の事も。
大泣きをしながら私の袖をしっかりと握って帰った、帰り道も。
いつも一緒だった。
大好きな私の子供。
この子さえいたら、私は太陽もいらないと思った。
どんな人に出会い、どんな人を愛し、どんな人と一緒にいるのか。

私のもとを去って行っても、幸せになる姿を見たかった。
わたしのかわいい、かわいい。かわいいわたしのこども。

私達の希望、魂。たった一つの望み。

滋野新剛。

25

2

僕がまだ小さかった頃、夏。
母が死んだ。
昔から体が弱かったと聞いている。

僕は夏が大好きだった。
夜の花火が好きだった。
家の庭先で大きな手から、目当ての花火を貰って、小さな僕の手を温かい手が優しく包み込み……火をともして、もらう。
「わぁ、きれい」
言いながら、ぱちぱちと光り弾け、消えゆく閃光の残像を眼が必死に追う。
両親は僕の後ろに立って僕を見ている。
「ねえ、お母さんもやろうよ」
僕は手に持っていた一つの花火を差し出す。
「いいの？　大好きなんでしょう、花火」
「うん。だって僕花火よりもお母さんの方が大大、大好きだもん」
「ありがとう」
そう言って母は僕から花火を貰うと、それに火をともして。
「きれいね」と何度も言う。
花火なんてそっちのけで僕の事ばかり見ているから、僕は、
「花火が消えちゃうからしっかり見なさい」と、言った。
その横で父が僕の分の花火は？　と聞いて。残りの花火は剛がやるの、といって、父から頭をくちゃくちゃに撫でてもらった。
皆が笑っていて、花火はすぐに消えてしまうけれども、綺麗だっ

た。

それが、母との夏の思い出であった。

最後の夏だった――。

25（後書き）

ポニョ；崖の上

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7791s/

俺たちには明日がないしねこのきもちはわからない、猫じゃないから

2011年9月25日03時12分発行